



英語の基本を教えるための、授業の基本：初期英語指導の基本

著者	小高 一夫
著者別名	Odaka Kazuo
雑誌名	Shoin literary review
巻	40
ページ	29-81
発行年	2007-03-20
URL	http://doi.org/10.14946/00001678



英語の基本を教えるための、授業の基本

—— 初期英語指導の基本 ——

Practical Principles of Beginning English Language Instruction

小 高 一 夫

<記載項目一覧>

はじめに

* I. A. Richards: 「初期言語指導の原則」

* 英語の基本習得期における、「ことばの働き」の指示性と指導優先順位

I. 本題設定の意図

1. 英語と日本語の差異

- ①言語的距離
- ②文化的差異
- ③植民地経験と自覚的動機
- ④周波数領域
- ⑤脳の違い
- ⑥他言語習得と日本語習得に要する時間の差異
- ⑦その他の問題——言語獲得の臨界期 (critical period) /
敏感期 (sensitive period)

2. 「学校英語」の限界と基本の習得

II. 基本習得期の目標

III. 基本習得期に役立つ「ことばの本質」

- 1. The Triangle of Meaning 「意味の三角形」
- 2. A Ladder of Abstraction 「抽象の梯子」

3. A Referring Function 「指示機能」 —ことばの本質から学ぶ授業の基本

IV. 基本習得期における導入の基本

1. 実物提示、実際の場の演示、絵図の提示
The Cone of Experience 「経験の円錐」
2. 日本語の排除
①「訳す」作業 ②日本語を介する授業のMerits and Demerits

V. 基本習得期における授業の仕方

1. 英語が伝達の道具であることを実感させる仕方
2. Sentence Structureを飽きさせずに、繰り返し練習させる仕方
3. 級友の自発的発言を正しく聴取できているかチェックする仕方
4. 日本語の助けを不要にする教材配列の仕方

VI. 基本習得期の授業を成就させる条件

1. 1クラスの学習者数
2. 1週の授業回数
3. 授業準備時間の確保

VII. 基本習得期の教材に相応しい語彙：BASIC English by C. K. Ogden

1. BASIC English誕生の契機と考案の基盤
2. BASIC English Word List
3. BASIC English、850語選定の具体的基準——BASIC Englishは「基本英語」
4. Panoptic Eliminator (贅語排除器)
5. 「動詞」の排除——BASIC Englishには「動詞」がない
6. 語彙の拡張
7. BASIC Englishから作られるメタファー
8. H. E. PalmerのSimple EnglishとBASIC English
9. 「北風と太陽」 in BASIC English

おわりに

<内 容>

はじめに

英語の指導で最も大切なことは、初期の段階で基本をきちんと習得させることである。ことばの基本は何か？英語の基本は何か？授業の基本はなにか？

学校は、基本を教えることに尽きるのではないか。充実した基本は、自ら創意ある応用に通じる。初期の英語学習とは、正に英語の基本の習得期を意味する。

本稿は基本的に、I. A. Richards (1893～1979) の言語観に基づき、日本の学校で初めて英語を学ぶ者の指導の仕方を考え、初心者に適した英語を推奨する。



Ivor Armstrong Richards, 1972
Photograph by Gyorgy Kepes
from
I. A. Richards (1974) *Poetries Their Media
and Ends*, Mouton

* I. A. Richards: 「初期言語指導の原則 (に関する要旨)」

NOTES ON PRINCIPLES OF BEGINNING LANGUAGE INSTRUCTION

Prepared by I. A. Richards for a UNESCO conference in Paris on June 19, 1947

From I. A. Richards (1968) *Design for Escape*, pp.125-127

1. 私たちは、新しい文または文の要素について、それが場の中でどのように適用されているかを、見ることによって学ぶ。
2. 教える時には、文と場を一緒にして、見えるかたちで提示する。
3. 以下、文 [SENTENCE] がその意味を与える場 [SITUATION] と結びついたこの構成単位を、SEN-SITという略語で表す。

4. 言語の効果的指導は、SEN-SITsを工夫して作り出し、配列し、提示し、テストすることで成り立つ。
5. 各言語とも、SEN-SITsの配列には理想的な順序がある。
6. この理想的な配列の順序では、
 - a) 各SEN-SITの曖昧さは、配列順序のその場所で、最小限である。
 - b) 各SEN-SITが、これから学ぶSEN-SITsの準備になる。
 - c) 各SEN-SITが、あとに続くSEN-SITsによって確かになる。
 - d) 新しいSEN-SITsによって既習のSEN-SITsが乱されるのは、最小限である。
7. 指導過程での一つひとつの段階が、それ以外の全ての段階と相互に支え合う有機的な順序だては、段階づけ (GRADING) によって達成される。段階づけというのは、つまり、その順序だての中での部分相互の関係という質の問題であって、毎日の授業の中で教えられる単語の数などといった量の問題ではない。
8. 文の構造が、わかり易い場の構造と対応していれば、そのSEN-SITは明瞭であるといえる。
9. 良い段階づけは、まず、できるだけ少ない要素を持ち、できるだけ明瞭なSEN-SITsを使って始まる。
10. 学習者には、文の構造は、その要素が場の要素に対応する変化の仕方から分かるように見える。構造というのは、たとえ、変数[可変要素]の値[要素・意味]が変わっても、決して変わらない形のことである。

It is here.

It is *there*.

He is *there*.

11. 変数[可変要素]をいろいろ変えて、構造を教える時に選ぶ語は、広い範囲で役に立つ語がよい。
12. 役に立つ語：
 - a) 学習者が、自分の知識をできるだけ速やかに広い範囲で使う (use) ことができる語。
 - b) 次の指導のために、最もよい準備になる語。
 - c) その語の助けで、他の役に立つ語が説明できる語。

13. 英語で、最も役に立つ（概して、最も使用頻度が高い）語：
 - a) Basic English Word Listの最初の欄にある機能語。
 - b) 最も実証できる（絵に描ける）、身近で一般的な物事を表す語と、その性質を表す語。
14. これらの語の中で、最も明瞭なSEN-SITsを作り出す語を最初に使うのがよい。
15. 肯定文の語順が確実に身につくまでは、疑問文を教えるのは延期する方が賢明のようである。
16. 学習者は、このような一連のSEN-SITsを通して学習を進めて行く時に、そのSEN-SITsの要素と構造を練習しなければならない。しかし、その練習は、単純な繰り返しではなく、いろいろに変わる構造の中で既習の要素を使ったり、変化した要素で同じ構造を使いながら、新しいSEN-SITsを実際に体験する練習でなければならない。
17. このような段階づけで、母語の助けを借りる必要はなくなる。母語に頼ると、次のようなことが起こるので、避けるべきである。
 - a) 母語の構文（*Constructions*）の干渉が起こる。これが非文法的言語(broken language)を使わせる最も根本的な原因になっている。
 - b) 母語の音素（*Phonemes*）の干渉が起こる。これが誤った発音をさせる根源になっている。
 - c) SEN-SITsの代わり、即ち、文がその対応する場[意味]と結びつく代わりに、母語がそれに対応する新しい言語と結びつく。その結果は必然的に、「母語で考えることになるので、」「新しい言語で考えること」はできない。しかし、「母語に頼らず、SEN-SITsによる学習をすれば、」「新しい言語で考えること」は、最初から可能である。
18. 翻訳という作業は、言語学習のずっと後の段階では望ましい練習であるが、初心者にとっては混乱と徒労の原因になる。段階づけされた提示は——正しく整えられた配列順序のSEN-SITを展開することで——「相当語句」と母語による説明をまったく不要にすることができる。

* [] 内、訳者注釈。(小高一夫 訳)

* 英語の基本習得期における、「ことばの働き」の指示性と指導優先順位

「初期言語指導の原則」Nos. 1～4

「ことばの働き」には次の3点が考えられる。

1. そのことばの意味(指示物)は何かを考える。——思考・指示的言語使用。
(Reference)
2. 物事(情報)や、考え(思考)や、気持ち(感情)を伝える。——目的・伝達的言語使用。(Communication)
3. 共感、好意、社交的な雰囲気伝える。——社交・交感的言語使用。(Phatic Communion)

そして、英語の基本習得期に、少ない時間でできるだけ効率よく指導するためには、①「思考・指示的言語使用」 ②「目的・伝達的言語使用」 ③「社交・交感的言語使用」の順番がよい。

* **思考・指示的言語使用**、即ち、我々はことばと、自分が過去に聞いたり読んだりした記号的経験や、実際に見たり体験したことなどを脳内で照合する。そして、その記号的経験と過去の体験の指示に基づいて自分の考えを創造し、ことばと行動で表現する。あるいは何もしないで頭の中に仕舞い込む。このようないずれの場合においても、ことばの果たす主な役割は、ことばと物事との照合、即ち、その指示性(Referring)にある。

* **目的・伝達的言語使用**、即ち、相手に物事や考えや気持ちを伝える道具としてのことばには、それが何であるのか、指示物を明らかにする必要がある。ここでのことばの主要な働きも指示性にあるといえる。

* **ただ、社交・交感的言語使用**、即ち、「どちらへ?」「ちょっとそこまで。」といった円滑な人間関係の保持を目的とすることばには明確な照合を必要としない。

従って、英語の基本習得期には、いわゆる挨拶英語(社交・交感的言語)の暗記に先立って、英語が指示する物事を明確に捉え、明瞭に伝える指示性を重視した指導が行われるべきである。なお、指示物は基本的に実物・実際、またはイメージ(pictures in the mind)であり、ときに具体的に指し示すことのできない虚構である。

しかし、虚構は、①その内容を分解して抽象度を下ろしたり、②身近な具体例を挙げるなどすれば、指示が可能になる。例えば、①‘animal’は指示できないが、分解すれば、‘dog’や‘cat’となって、指示できる。②‘love’の場合は、テレビなどで騒がれているA, Bの二人がいたら、A and B are in love with one another/each other. として、具体例の形で示すことができる。‘love’は外在的には見えないが、脳内で一人ひとりがそれぞれのイメージとして指示することができる。

I. 本題設定の意図

- ① 現在の日本では中学・高校までほとんど全員が就学し、その多くが外国語として英語を選択している。さらに、大学まで進学し、膨大な時間とお金と労力を費やしながらも、ごくわずかの者しか、英語を普通に使うことができない。消費した時間と経済と若者のエネルギーを考えると、個人一人ひとり言うに及ばず、日本国としても大変な無駄遣いであり、本当に、もったいない。
- ② もはや国境は崩れつつある。世界の様々な国の人々が日本で働くようになるのをいつまでも拒否することはできない。英語を、かつての侵略の道具と考えず、地球人のauxiliary languageと考えて、誰でも、自分の能力に応じて、それなりに使えるようにしておきたい。
- ③ 世界の現実を見れば、英語は「イギリス語」や「アメリカ語」から離れた存在になっている。英語の母語話者も、いま自分が使っている英語は、異なる文化の人たちに理解して貰えているのか省みて、「世界通用語としての英語」を勉強して貰いたい。

以上のことを前提にして、この不毛な現状を抜け出すときのネックは、英語と日本語の差異の大きさである。それは、日本語→英語に限らず、英語→日本語の場合も同様である。差異についての詳細な記述は省略し、項目のみを概観しても、日本語の母語話者が英語を学ぶ時のしんどさ、大変さを納得することができる。

1. 英語と日本語の差異

「言語的距離をどうやって具体的に測るかは難しい問題ですが、たとえば、パラメータの値が逆になっている度合いが高ければ、類似度は低いといえましょう。これ以外にも、もちろん、発音（音素）の類似度、単語の意味の類似度、社会性の表現（たとえば、敬語）など、類似度を決める要素はいろいろありますが、これらもろもろを考慮すると、日本語と英語との距離はかなり大きく、むしろ、英語とドイツ語のような広い意味でインド・ヨーロッパ語族同士の場合とは比べものになりません。日本人は英語が下手だとよくいわれ、自分でもそう信じ込むせいか、ネット経済に立ち後れるとか、はては英語第二公用語論まで飛び出す昨今ですが、距離の大きさを考えれば、ある程度までは当然なことです。距離が遠ければ、二言語は共存しにくいので、併用の場合はことに負担が大きいと考えねばなりません。」

藤永保 (2001) 「ことばはどこで育つか」 大修館書店, p.194

①言語的距離 (異言語族)

英語と日本語とは異系列の語族という言語的に大きな隔たりがある。英語と同属のインド・ヨーロッパ語の、ゲルマン系 (オランダ、ドイツ、スウェーデンなど) やロマンス系 (フランス、スペインなど) の言語と違い、日本語と英語とは言語的距離が非常に大きい。

②文化的差異 (High Context • Low Context)

コミュニケーションに際しては、伝達がことばに大きく依存するLow Contextの欧米とは対照的に、日本はHigh Contextの文化、即ち、ことばを使う伝達よりも周辺、周囲、前後の状況・場面の判断によって理解する、いわゆる「察する文化」に価値を置く。

③被植民地経験と自覚的動機

シンガポールやフィリピンなどと異なり、歴史的に日本は英米による被植民地経験がないので英語との接触が浅い。

「日本では学校の『英語の時間』の外部の環境において——学校でも、家庭でも、社会でも、TVでも——子供の生活は英語を必要としない。

したがってそれを習う自覚的動機は弱い。」

(加藤周一, 朝日新聞・夕刊, 2006年4月19日)

④周波数領域

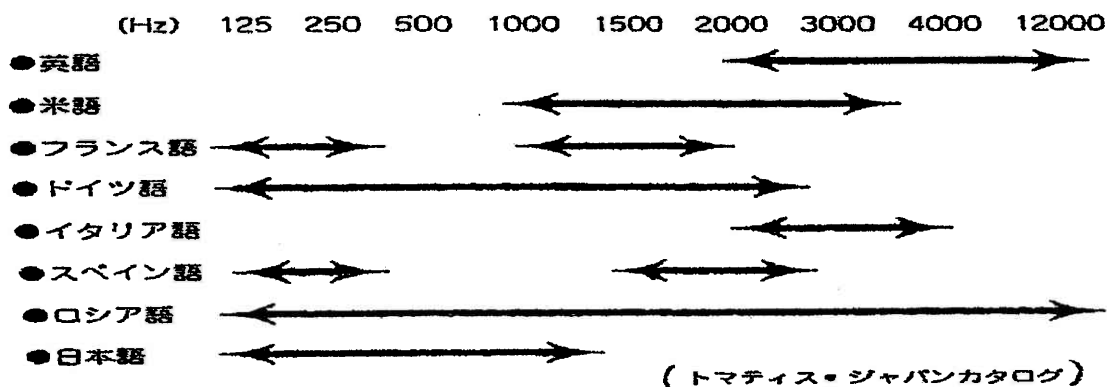
世界の各言語は、それぞれ音の周波数領域を持っている。日本語が低周波言語 (125hertz～1,500hertz) であるのに対して、英語は高周波言語 (2,000hertz～12,000hertz) なので、日本語母語話者にとって英語は聞き取りにくい。周波数が大きく異なる音は聞き取りにくく、意味を持たない音、すなわち、雑音となって耳に入る。フランス人にとっても、日本人ほどではなくても、英語を苦手にする人の多いことが分かる。英語で話しかけられると無視するのは、ここにも理由があるのかもしれない。

一方、ロシア語は、125hertzから12,000hertzまでの全ての音域をカバーしている言語なので、ロシア人にとって英語は聞き取り易い。

- * 米語周波数領域 1,000～3,800hertz
- * フランス語周波数領域 125～約400hertz；約1,000～2,000hertz
- * ドイツ語周波数領域 125～3,000hertz
- * イタリア語周波数領域 2,000～4,000hertz
- * スペイン語周波数領域 125～ 500hertz；1,500～約2,500hertz
- * ロシア語周波数領域 125～12,000hertz

cf. 乳・幼児 (0歳～6歳) の聴取可能周波数領域：16～16,000hertz

村瀬邦子 (1996) 「トマティス流 最強の外国語学習法」日本実業出版社, p.81



ここで、幼児の聴取可能周波数 (16～16,000hertz) から推察すると、この時期の聴覚主導の外国語教育には、自然な合理性があるように思われる。

⑤脳の違い

脳研究では門外漢の私が注目したい箇所は、次の点である。

* 日本語母語話者と非日本語母語話者との脳の機能が著しく違う。

角田忠信・田中靖政・大森莊蔵・沢田允茂（1986）「言語・意識・生活」共立出版

* 英語が、日本語母語話者の左右の脳機能のバランスを崩して正常な働きを阻害する。 角田忠信（1981）「右脳と左脳—その機能と文化の異質性」小学館

* 第二言語の学習能力と一般的な知的能力とは、それぞれ独立したものである。つまり、両能力は関係ない。

N. スミス&I. M. ツインプリ（1999）「言語学習と心のモジュール性 ある言語天才の頭脳」（毛塚恵美子・小菅京子・若林茂則共訳），新曜社

<左脳（言語脳）>

シンボル操作

（理論的、解析的）

- * 言語的知性
- * 論理数学的知性

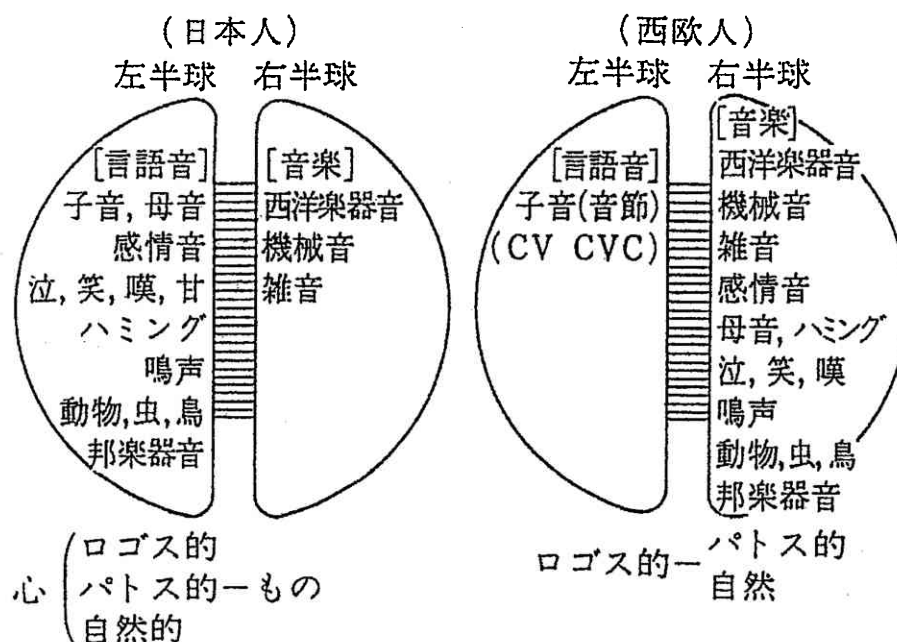
<右脳（音楽脳）>

イメージ操作

（直観的、構成的）

- * 音楽的知性
- * 絵画的知性
- * 空間的知性

自然音、言語音、楽器音の認知機構の差（角田法）



角田忠信（1985）「脳の発見 脳の中の小宇宙」大修館書店，p.105

前頁の絵図で、日本語を母語とする人と、日本語以外の言語を母語とする人の脳の機能に、大きな相違があるのは一目瞭然である。日本語母語話者の脳では、数多くの機能が左脳に偏っている。つまり、左脳が理性と感性と自然とを合体させて働くのがわかる。

この脳に英語が入ると、普段、音楽脳（右脳）優位に処理されているオーディオメーターの純音や西洋楽器の音といった非言語音までも、言語脳（左脳）に移ってくる。すると、左脳が超過密になる結果、脳の生理機構が崩れて、右脳のはたらきが抑制されるために、右脳が本来機能している直観や創造力が働かなくなってしまう。左右の脳がバランスよく働くことによって初めて、右脳が働き、発言の根源になるアイディアも湧いて、思考が構築されるのである。例えば、英語を使う会議で、母語の日本語では能弁な人に起こるダンマリは、この結果であると推測される。

このように日本語母語話者にとって英語が難しい原因の一つは、両言語の相違が著しく違うために、英語を聴くと脳機構がバランスを欠き、不適応症状が起きること。その結果、右脳の機能が抑制されて、直観が働かなくなり、アイディアが貧困になるから、柔軟な発想による発言ができない。

角田忠信（1978）「日本人の脳」大修館書店，p. 84

角田忠信（1981）「右脳と左脳—その機能と文化の異質性」小学館，p. 67

角田忠信（1985）「脳の発見」大修館書店，pp. 102～113

角田忠信・田中靖政・大森莊蔵・沢田允茂（1986）「言語・意識・生活」共立出版，p. 25

⑥英語母語話者が、他言語習得と日本語習得に要する時間の差異

大谷泰照氏が、英語の母語話者で日本語など複数の言語の学習経験者106人を対象にした調査によると、彼らにとっての言語的距離は、フランス語習得に要する時間を1とすれば、ロシア語3～4倍、中国語6～7倍、日本語10倍という結果が出た。

（大谷泰照，朝日新聞・夕刊，2004年10月23日）

⑦その他の問題——言語獲得の臨界期（critical period）／敏感期（sensitive period）

これは日本語ではなく、イタリア語、タイ語、スペイン語、スウェーデン語、ドイツ語、フランス語、ノルウェー語、ヘブライ語の第二言語使用者の音韻体系と言語習得の臨界期の研究であるが、一般論として、思春期を過ぎて第二言語を習得した人のほとんどは、文法能力と語彙知識ではかなりの程度まで習得できるかもしれないが、少なくとも発音に

においては「なまり」が出る。即ち、思春期を過ぎてから母語話者なみの言語能力を習得した人の例は少ししかない。

L. K. オブラー & K. ジュアロー (2002) 「言語と脳—神経言語学入門」 (岩林茂則・割田杏子共訳) 新曜社, pp. 99~101, 189~216 ; L. K. Obler and K. Gjerlow (1999) *Language and the Brain*, Cambridge University Press

藤永保氏に拠れば、レネバーグの小児失語症の研究から推測される言語獲得臨界期は12, 3歳であるが、研究の前提が正常児の言語獲得過程を正面から捉えているのではない。言語生得説につながり易い臨界期といった単純な仮説で言語獲得を理解しようとする無理がある。

藤永保 (2001) 「ことばはどこで育つか」 大修館書店, pp. 196, 198, 228

また、はっきりわかったこととして、第二言語の学習能力は他の一般的な知的能力からは独立したものであるという事例も発表されていて、英語不得手な日本人にとってはホッと一息つける。即ち、指導の仕方と学習環境の整備をすれば、日本語を母語として育つ学習者にも光明が見えてくるということである。

L. K. オブラー & K. ジュアロー (2002) 「言語と脳—神経言語学入門」 (岩林茂則・割田杏子共訳) 新曜社, pp. 206~207

2. 「学校英語」の限界と基本の習得

先ず、日本語を母語とする者が英語学習に際して、上述のように非常に大きな負荷を背負っている事実を強く認識しなければならない。次に、英語が一部のエリートのためだけではなく、中学から高校までのほとんど全員に対して指導されていること。そして、1週5授業時間程度を当て、多くの場合、日本語を仲介した知識重視の授業が行われている現実がある。

ところで、仮に1週5授業時間 (50分×5回=250分) としても、1週間に英語に接する時間は英語国滞在1日の1/3 (1日の睡眠時間8時間を引いて、 $24 - 8 = 16$ 時間=960分) にも相当しない。1年間でも、10日 (年間35週として、 $250 \times 35 = 8,750$ 分 $8,750 \div 960 \div 9$ 日) に満たない。その他にも数々の悪条件の下にあって、「学校英語」でできることは極めて限られている。

それは、唯一、英語の基本の完璧な習得を目指すべきである。この一事さえ成就させておけば、将来、各自が仕事で接する英語を正しく理解し、

短期に習熟できる。また、英語国で体験する実際の英語習得も容易になり、進歩も速まる。当然のことながら、仕事に直接役立ち、学業では興味の発見に役立つであろう。

従って、基本習得期にはことばの本質的観点から、どのような目標を掲げ、どのような言語観に則り、どのように教材を扱い、どのような方法で教えたら、学習者は自分のことばとしての英語を習得できるか、その授業を成就させるための条件は何か、さらに、どのような英語を学習したらよいか、等々「英語の基本を教えるための、授業の基本」はどうあるべきかを考察する意図を以ってこの主題を設定した。

Ⅱ．基本習得期の目標

下記の技能が身についたとき、英語学習の基本習得期は終了したといえる。

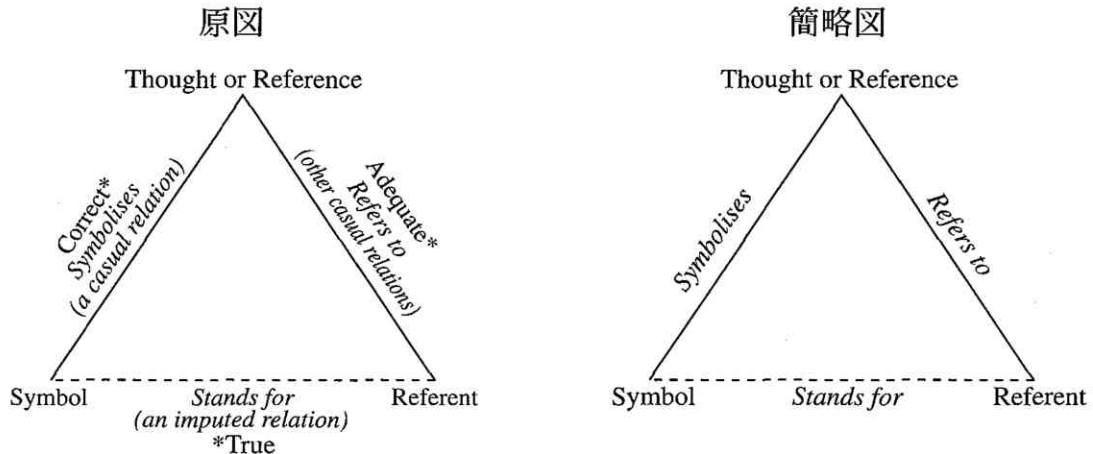
1. 身近な事柄・状況と、自分の知識・体験を手持ちの英語で口述できる。
2. いま口述した事を、基本を守って、間違えずに手持ちの英語で書ける。
3. 自分の語彙の範囲で話された英語なら、日本語に直さずに理解できる。
4. 自分の語彙の範囲で書かれた文章なら、日本語に訳さずに理解できる。

*手持ちの英語：意味（referent）と用法（usage）が、日本語の助けを借りずに理解でき、自分のことばとして母語同様に使える英語。

Ⅲ. 基本習得期に役立つ「ことばの本質」

1. ‘The Triangle of Meaning’ 「意味の三角形」

*C. K. Ogden & I. A. Richards (1923) *The Meaning of Meaning*, Routledge & Kegan Paul Ltd., p.11



「意味の三角形」が述べていることは、概ね、“Symbol”と“Thought or Reference”、および“Thought or Reference”と“Referent”とはそれぞれ直接の関係を持っているが、“Symbol”と“Referent”の関係は間接的であることを示している。

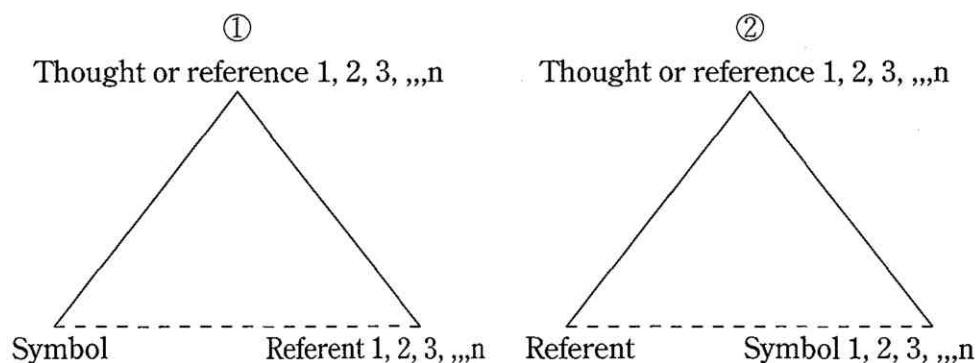
即ち、ことばは一旦、脳に入り、過去の経験によって得ている脳内のイメージ (pictures in the mind) や考えと照合されてから、意味が決まるのであり、最初から固定した意味をもっているのではない。

普段、我々はSymbol (記号、ことばや写真など) とReferent (指示物、意味) とは直接の関係があるように思い易いが、記号とその指示物との間には必然的な関係はない。しかし、記号とその指示物との混同は個人ばかりでなく社会的にも、また文化的レベルでも頻繁に行われている。戦時中、天皇陛下の写真をもがけで火災から守った校長先生のお話は、その当時を知る日本人なら誰でも知っていることであり、またそれは当然なこととして教育されていた。

この話は、写真という記号と天皇陛下という人間 (生き神様!) を意図的に利用していたことであるが、我々の神経系は記号とその指示物、そして、指示物に係わる経験を同一視する傾向がある。映画の中の俳優の演技 (記号) を俳優その人 (指示物) と勘違いするのは日常茶飯事にあることだし、

Korzybskiの例にも、バラの花 (記号) があると必ず花粉熱にかかる (経験) 男の話がある。ある日、バラの花を一束、突然その男の目の前に持っていくと、彼はたちまち猛烈な花粉熱の発作を起こした。ところで、そのときのバラは、実は、造花であった。

また、「意味の三角形」は、次のことも示している。①同じことばであっても、人 (脳) が替われば意味は変わる。逆に、②伝えたいと思う意味も、人の脳で判断されてからことばが選ばれるから、人 (脳) が替わればことばも変わる。これを図示すると、下のようになる。



以下、さらに詳細に検討する。

“Symbol” には、Verbal SymbolとNon-verbal Symbolがある。Verbal Symbolは言語 (ことば) のことで、Non-verbal Symbolは、非言語、即ち、絵図 (写真)、音、身振り動作など、ことば以外の伝達手段をいう。

“Thought or Reference” とは、Symbolの刺激を受けて脳内に浮かぶ過去の経験から作られるイメージ (pictures in the mind) を、あれか、これかと照合し、反応すること、即ち、思考・指示 (作用) をいう。

“Referent” とは、Thought or Referenceによって決まった実際の物事、イメージ、ときに、指し示すことのできない虚構。即ち、Symbolの意味である。

この “Symbol” ← (象徴) → “Thought or Reference” ← (指示) → “Referent” の流れは確実であり、適切であるから実線で示してある。即ち、Symbolは因果関係において確実にThought or Referenceを表し、同様にThought or Referenceも他の因果関係からReferentが何であることを適切に指示する。だから、実線で描かれている。一方、SymbolはReferentの代わりをしているに過ぎない。双方は互いに想定される関係にあるので、点線で描かれてい

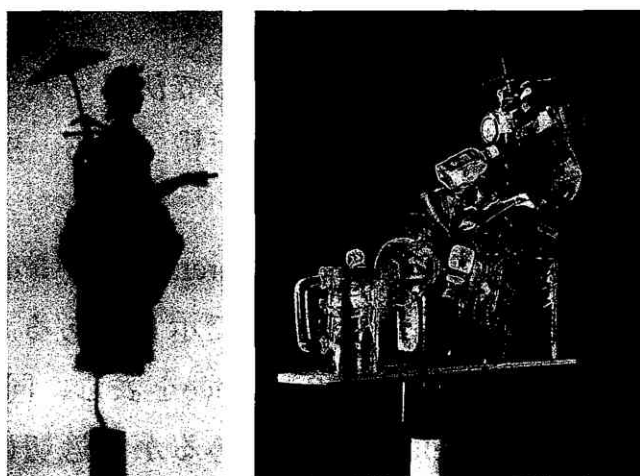
る。

例えば、ことば“CAT”は、人の脳に届いたとき、正確にその人だけの過去の経験と呼び起こす。そしてその人は脳内で、ことば“CAT”と、過去の経験で得ているイメージとを照合・判断し、適切な実物の猫を指示して決める。

従って、実物の猫は、ことば“CAT”が一人ひとりの脳で思考・指示（作用）を経てから決まるので、厳密には、一人ひとり異なる。最初から、どの猫とは決まっていない。

逆に、実物の猫を見ても人によって、猫好きであれば、“gentle pet”, “good ratter” が浮かび、猫嫌いな人は “fierce fighter”, “bird-catcher”, “flea carrier” などのことばが浮かぶ。同じことばでも、AさんとBさんのSymbolの意味は、猫好きの程度が異なれば、同一ではない。つまり、Symbol ≠ Referent である。

またところで、下図左のSymbol「影絵」は、脳内で「貴婦人」を思い浮かばせるが、脳が指示した「貴婦人」のReferentは、下図右の「ガラクタの積み上げ」であった。Symbolが、脳内の潜在的意味の要素からは指示できなかったReferentの出現である。脳自体から見ても、まさに裏切りの、Symbol ≠ Referentであった。しかし、もし脳が意図的に操作をすれば、ことば (Symbol) は嘘をつくことができる。いずれにしても、Symbol=Referentは、ときには大きな危険をはらむ。看板アイドル、ペコちゃんの「不二家」のケーキは「(賞味) 期限切れ」。



片桐ユズル (2002) 「見て分かる 意味論の基礎とBASIC English」 京都修学社, p. 10

* R. P. Forest のことばを参考にした ‘The Triangle of Meaning’ 「意味の三角形」のまとめ：

- ① Words in themselves, have no meaning. Each person has his own meanings, which depend on what he refers to with his words.
- ② Words are not the thing signified (“referent”). A person’s “referents” will depend on what he believes to be important.

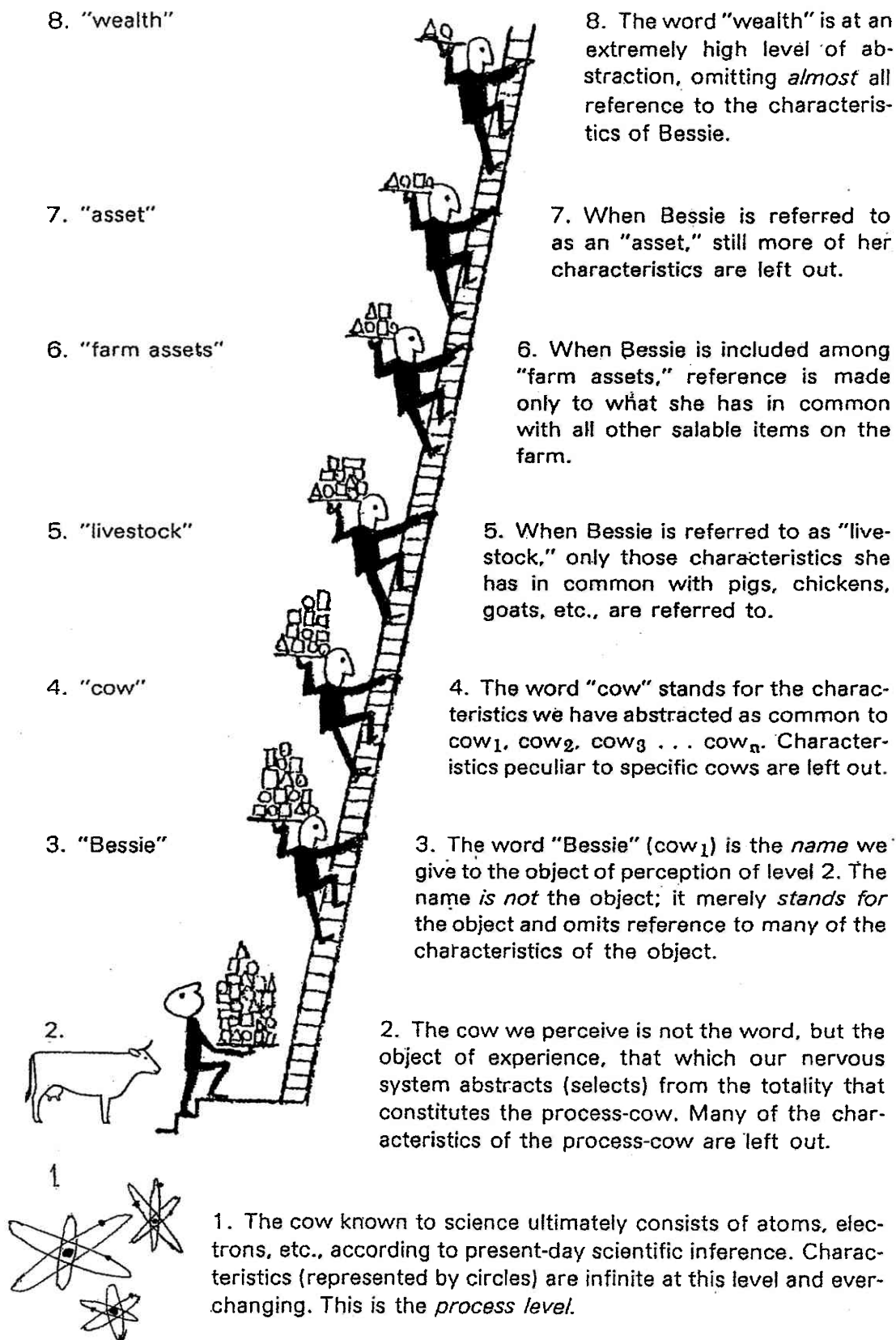
R. P. Forest (1972) *About Semantics*, Channing L. Bete Co. Inc., p.5

- ① ことば自体に意味はない。人は皆、他の人とは違う自分だけの意味を持っている。そしてその意味は、その人がことばを言って指示した物事である。
- ② ことばは、ことばが指示する物事（意味）ではない。意味というのは、[人それぞれが脳内にある、過去の経験から得た考えやイメージ（pictures in the mind）が指示する] 物事であるが、人はそれらの物事を、手堅く照合・確認することもなく、無意識にこれだと感じていることで決めている。

2. 'A Ladder of Abstraction' 「抽象の梯子」

* S. I. Hayakawa (1941) *Language in Thought and Action*, Harcourt, Brace & Co., Inc., p.153

* Otto Neurath (1948) *Basic by Isotype*, Basic English Publishing Co., p.42



私たちは一つの物事を複数のことばで言い表すことができる。しかし、それらのことばには、抽象のレベルに違いがある。例えば、左頁の図「抽象の梯子」でレベル2の実物・牝牛に、レベル3で“Bessie”という名前(ことば)を付ける。Bessieを“cow”(牝牛)というのと、他の“cows”も含まれる。そこで、Bessieを“cow¹”とすれば、他の牝牛はそれぞれ“cow²”, “cow³”, …, “cowⁿ”となる。即ち、Bessieの特性は全ての牝牛と共通するところだけが残り、他の特性は除外される。

Bessieを“livestock”(家畜)といえ、豚、鶏、山羊、などとの共通した特性だけが取り上げられ、Bessieの他の特性は落とされる。

Bessieを“farm assets”(農場資産)に含めれば、農場で金銭とみなすことのできる財産と共通する特性だけが取り上げられる。

Bessieを“asset”(資産)として考えれば、さらに多くの特性が除外される。

そして、Bessieを極めて高いレベル8の“wealth”(富)といえ、Bessieの特性はほとんど失なわれて、姿さえ思い起こすことは難しい。

このように、抽象のレベルが上がるほどに、ことばの指示物は増えるが、レベル2の実物の特性は失われていく。

ところで、ことばの指示物であるレベル2の実物・牝牛そのものは、レベル1の原子(陽子・中間子・中性子・電子などの粒子)で構成され、肉眼では見えない。例えば、われわれは、赤から紫までは見えるが、それ以外は見えない。つまり、光の、ある波長からある波長までの範囲のものしか見えないし、また、ある周波数の範囲の音しか聞こえない。視覚、聴覚にかぎらず、触覚、嗅覚、味覚のすべてについて同様のことがいえる。

即ち、実物という形のあるものは、われわれの神経機能の及ぶ範囲での存在であり、そのものの真の形は見えない。しかし、逆に、見えない真そのものは、神経機能の及ぶ範囲で、形として見ることができる。まさに色即是空、空即是色の世界を彷彿させる。

また、この1億分の1センチという原子レベルでのBessieの諸特性は不定で、瞬時も停止することなく、無限に変化し続ける過程(即ち、常に進行・変化・発展を続けている)のレベルである。固定しているように見えるのは、急速に回っている色盤が白く見え、速く回っているコマがじっとしているという意味で固定しているに過ぎない。現代の科学にとって、固定したも

のではない。

従って、真に何かがこうであると完全に言い切ることはできない。Bessieは静止した客体ではなく、力動的な過程である。厳密に言えば、今日のBessieは昨日のBessieではない。同様に、Bessieを表現する数々のことばも、決して全く同じ意味を持つことはない。ギリシャの哲学者Herakleitosのことばを借りれば、「人は同じ川に二度入ることはできない。」

3. 'A Referring Function' 「指示機能」—ことばの本質から学ぶ授業の基本。

*「**意味の三角形**」から、同じことばでも一人ひとり異なるReferent（指示物・意味）を持つことと、逆に、一つのReferentから浮かぶことばも、一人ひとり異なることがわかる。即ち、脳内に潜在する意味の決定要素は一人ひとり異なるので、ことばは唯一の正しい意味を持っているのではない。

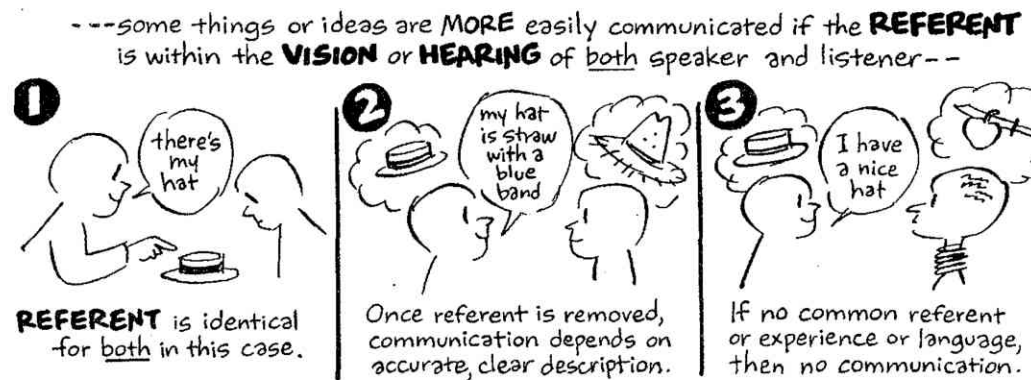
このことから、辞書も意味の領域の画定はするが、外在的な個人の意味（実際）を直接に載せているのではなく、意味の似通った状況の群を記しているに過ぎないことがわかる。

*「**抽象の梯子**」からは、一つの物事はレベルの異なる複数のことばを持ち、ことばのレベルが上がれば上がる程にそのことばのReferentは多くなることがわかる。しかも、Referentそのもののすら、常に変化している。

以上、二つのことばの本質から明らかなように、ことばの意味は極めて不確実である。この不確実性を補い、意味を正しく伝達するために最も重要なことは、ことばのReferentを明らかにすることである。

従って、授業においては、指導する英語の指示するもの（Referent）が、学習者の目に見えるように、実物、実際の動作、絵図などで明確に提示されることが大切である。

Referentの一般性が大きく抽象度が高くて、実物提示ができないときは、類似した実例を示すとか、身近なことばで説明して、誤解を最小限度に抑えなければならない。身近なことばは、人々に共通の物事を想起させるので、Referentを共有し易いからである。



R. P. Forest (1972) About Semantics, Channing L. Bete Co., Inc., p.5

従って、学習者にとっては、その英語が何を指示しているか、指示する物事をイメージして、明確に捉える習慣を身につけることが大切である。

なお、この習慣は、母語ではスキップし易いが、英語を学ぶ過程で一語一語を実際と照合し、確認しながら学ぶことによって、初めて身につけることができる。英語学習のMeritである。

ただし、英語を日本語に置き換える作業をすれば、日本語で考えることになり、効率が悪いばかりでなく、従来と変わらぬ日本の英語教育に戻ることになる。

IV. 基本習得期における導入の基本

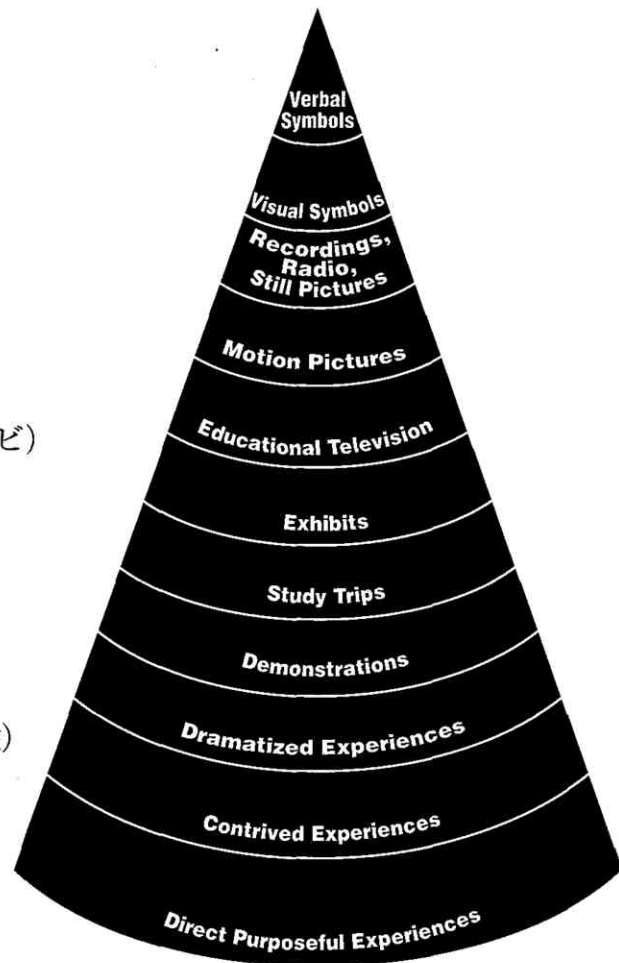
1. 実物提示、実際の場合 (Live Situation) の演示、絵図の提示

「初期言語指導の原則」 Nos.2, 4, 8, 9, 14

‘The Cone of Experience’ 「経験の円錐」

* E. Dale (1969) *Audio-Visual Methods in Teaching*, p.107

11. Verbal Symbols (言語的象徴)
10. Visual Symbols (視覚的象徴)
9. Recordings, Radio, Still Pictures
(レコード, ラジオ, 絵)
8. Motion Pictures (映画)
7. Educational Television (教育テレビ)
6. Exhibits (展示)
5. Study Trips (見学旅行)
4. Demonstrations (演示)
3. Dramatized Experiences (演劇経験)
2. Contrived Experiences (雛形経験)
1. Direct Purposeful Experiences
(直接的・目的的经验)



上図は学習過程における視聴覚教材が占める位置と教材相互の関係位置を示しているが、感覚教材が学習の最も具体的な経験から最も抽象的なものへと移行していくのがわかる。下から上へ進むに従って具体性・直接性を減少し、抽象的・間接的になる。例えば、「演示」は「見学旅行」より直接的であり、「演劇経験」より抽象的であることを示している。ただ、「演劇経験」の場合も見ただけの時と自分がやる時とは学習の強さが違うし、「演示」の場合も、教師が演示したことを学習者にやらせた場合は一層強力な指導になる。

ことばの意味は実際の経験と、本を読み、人の話を聞くなどの記号的経験によって決まる。最も確かな意味は実際の経験に勝るものはない。しかし、現実的に実際の経験だけでは限りがある。われわれは物事の大部分を記号的経験によって知り、人生をいきている。良い文学を読んだ人々は、読めない人々、読まない人々より、より多くの人生を生きていると言えよう。

それにしても、実際の経験と記号的経験の差は大きい。テレビで戦闘の場面を見ていても怪我はしない。小説の主人公が美味しいお寿司を食べていても、読者の味覚は満足しない。しかし、戦争を経験した人、美味な食べ物食した経験のある人はない人と、ない人はある人と異なる意味を理解する。円錐の頂点に位置することばの意味は、基本的に全て底辺の「直接的・目的的经验」、即ち、実際の経験によって裏付けられていることがわかる。

「直接的・目的的经验」は現実の生活そのもの、生々しい体験であり、手で触れて確かめられるもの、歯を立てて確認できるもの、である。子供の頃の豊かな思い出はすべて直接経験に関係している。それは瑞々しく、新鮮な感覚に満ちている。この直接経験が円錐の底辺に位置していることは、これがあらゆる効果的学習の基盤になっているということである。

英語の授業でも指導に効果的な実際、例えば、実物の提示、演示を経て、テレビ、フィルム、テープレコーダー、絵などの利用を積極的に心掛け、最後に、目的とする「言語的象徴」(ことば・英語)に導けば、豊かな経験を基盤とした英語を与えることができる。その英語はきっと、学習者の手持ちの英語になるであろう。

2. 日本語の排除「初期言語指導の原則」Nos. 17, 18

英語と多くの相違点を持つ日本語を仲介させることは、英語構文の習得を阻み、発音の習熟を遅らせ、直読直解をできなくさせる原因になっている。

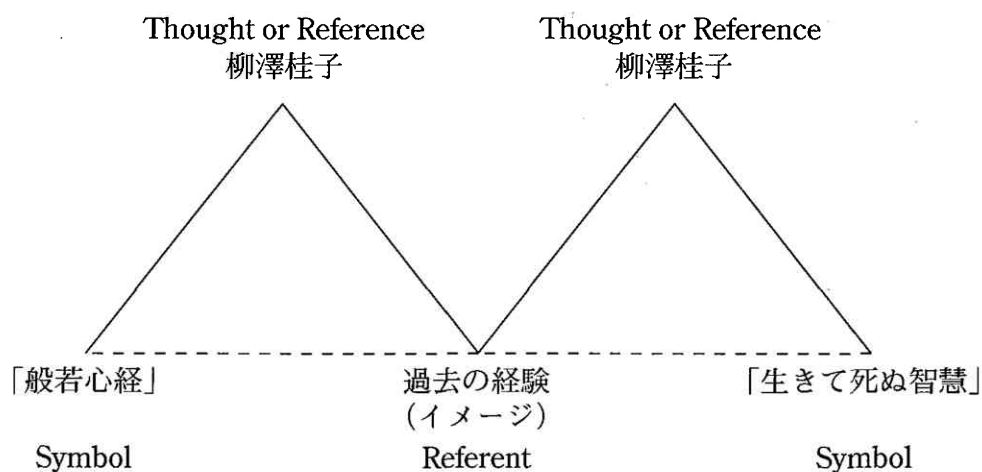
直読直解というのは、英語で考えるということであり、それは英語の指示物を直接、脳内にイメージすることである。英語とそれに対応する日本語を結びつけない。

もし、英語と日本語を結びつけば、それは日本語で考えることになり、第1章で述べた日本語と英語との大きな差異、即ち、①言語的に距離が大きく離れていること、②コミュニケーションにおいてはHigh Contextが身上の日本とLow Contextな英語文化との差異、③英語を使わなくても生活に困らないことに起因する英語学習に対する自覚的動機の欠如、④高周波の英語と低周波の日本語の差異、⑤右脳と左脳の生理的機構の不均衡による創造性、アイディアへの抑制、⑥英語母語話者にとっても難解な日本語学習、⑦思春期以降に始めた学習者には難しい英語の発音、等々数多くの負荷を担うことになる。さらに、それ以外にも、「訳す」という作業そのものには本質的に時間と複雑さが伴うことを下に記す。

①「訳す」作業

「訳す」作業は、原本のことばが脳内に潜在する過去の経験に作用して、自分のReferent（指示物・意味）を決定し、次は、そのReferentが指示する脳内の別の経験を表出するSymbolを見つける作業である。同一人が、抽象度の高い作業である“Thought or Reference”を二度にわたって稼働させなければならない。左脳と右脳の生理的機構の不調和が再び引き起こされることになる。

例えば、「般若心経」の翻訳、柳澤桂子著「生きて死ぬ智慧」（小学館）の作業を「意味の三角形」に当てはめると下記のようなになる。英文和訳または和文英訳の作業では、抽象度と複雑さが一層高まることは言うまでもない。



「般若心経」

「生きて死ぬ智慧」

色 即 是 空

お聞きなさい

形のあるもの

いいかえれば物質的存在を

私達は現象としてとらえているのですが

現象というものは

時々刻々変化するものであって

変化しない実体というものはありません

空 即 是 色

実体がないからこそ 形をつくれるのです

実体がなくて 変化するからこそ

物質であることができるのです

柳澤桂子 (2004) 「生きて死ぬ智慧」 小学館, p.7

②日本語を介する授業のMerits and Demerits

2005年6月、尼崎市立武庫東中学校へ教育実習の視察に行き、実習生の日本語を使う授業を見たときに思ったことである。授業はよく準備され、順調に進んでいたが、生徒が習得している英語に少なからぬ危惧の念を抱いた。

<Merits>

- * 短時間に沢山の知識が与えられる。on = 「～の上に」で終わることができる。
- * 生徒は英語の新しい知識を得て、「勉強した」実感が持てる。
- * 先生が話す冗談やことばのあや (figure of speech) など、表現上の技巧が楽しめる。
- * 質問し易く、先生や級友とのコミュニケーションが取り易い。
- * 教師が、比較的気軽に授業に臨むことができる。

<Demerits>

- * 英語を一旦、日本語に訳してから理解する。直読直解ができない。
- * 目の前の場面や状況を直接に英語で表現できない。時間がかかる。
- * Broken English、即ち、英語として誤った構文を作る原因になる。
- * 日本語の発音 (sound, rhythm, stress, pitch, intonation) になり易い。
- * 英語的発想 (無生物主語など) が思い付きにくい。

V. 基本習得期における授業の仕方

1. 英語が伝達の道具であることを実感させる仕方：

「初期言語指導の原則」Nos.1～4

Situation (場) を表現するSentence (文) は、必ず実際と一致させる。実際と違うこと、嘘を言わない。

例えば、教師が教卓で自分の手を示して、This is my hand. と言えば、学習者はThat is your hand. と言う。また、教師がThat is your hand. と言えば、学習者は自分の手を指差してThis is my hand. と言う。

ことばの意味は、特に、基本習得期においては、実物、実際であることを体験させることが大切である。従って、「経験の円錐」の底辺、直接的・目的的经验に近い導入と練習を心がけなければならない。英語ゴッコのようなフィクションは、学習者が自らの脳で行っている規則の作成作業を混乱させるので、避けることが望ましい。つまり、嘘はつかない。

2. Sentence Structureを飽きさせずに繰り返し練習させる仕方：

「初期言語指導の原則」Nos. 10, 16

<tookを用いたS + V + O + Prep. phrase構文の授業>

机上に本、帽子、鞆、グラスを置いたsituationをつくり、

T: This is a book. It is on the table. と、そのsituationを既習の文で表現する。それを聞いて学習者は次のように言う。

Ls: That is a book. It is on the table.

T: (無言で、帽子を指さす。)

Ls: That is a hat. It is on the table.

T: Good! と言ってから、bag, glassについても指で示すだけで学習者に言わせる。

以上は、全て既習の語句と構文による新構文導入のための復習である。次から新構文の導入に入る。

T: 本を取る。I took the book off the table. tookしたことをジェスチャーで示しながら、ややゆっくりと、しかし、英語の発音 (rhythm, stress, intonation, etc.) は正しく、もう一度言う。

T: I took the book off the table.

次に、帽子についても同様に行く。

T: I took the hat off the table.

この間、学習者は、situationと一致したsentenceで表現している教師の演示 (demonstration) を観察している。

3 回目に当たる鞆の時は、教師は鞆を取った後、学習者 (Ls) を誘いながら一緒に言う。

T&Ls: I/You took the bag off the table.

4 回目のグラスの時は、教師はグラスを取った後、学習者全員に向かって一緒に言うように顔の表情や仕草を使って指示する。

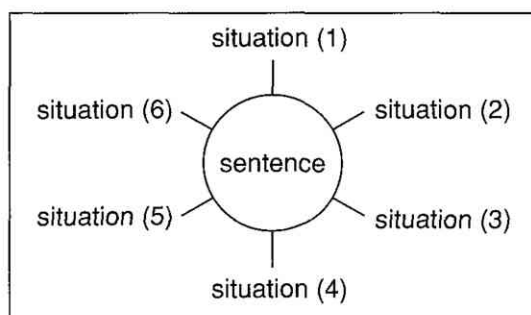
Ls: You took the glass off the table.

T: Good! と言って、個人を数名指名してから、もう一度全員で言わせて盛り上げる。

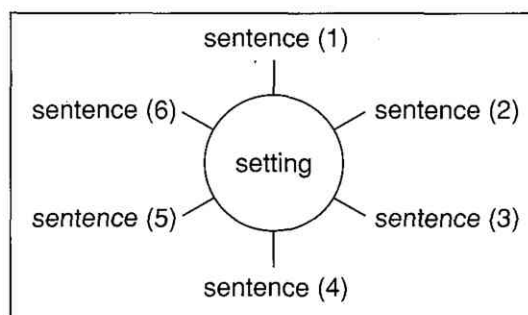
以上、tookを使ったS + V + O + Prep. phraseの導入と練習は、O (目的語) に実物 (book, hat, bag, glass) を次々と代替させた作業であるが、学習者は実物に注意を向けているため、常に新鮮な気持ちで新構文を何度も繰り返し使うことになる。

この指導の仕方を図示すると、下記左図のようになる。

<好ましい指導の仕方>



<一般的な指導の仕方>



吉澤美穂 (1981) 「教科書を使いこなす工夫」 大修館書店, p. 22

上述したように、ひとつの新構文に対して、今回の場合は実物の①本、②帽子、③鞆、④グラスを用いて4つのsituations (1) ~ (4) を作った。situation (1) では、教師は実物①を使って、演示する。同様に、situation (2) では、実物②を使って演示する。ここまで学習者は教師の演示を注意

深く観察し、その文型と意味を自分で発見する。situation (3) では、実物③を使って、演示しながら、学習者を誘って一緒に言う。situation (4) では、教師はことばを使わずに実物④を指し、顔の表情や仕草を使って、学習者だけで一緒に言わせる。次に、数人の個人に言わせ、最後にまた全員で行って、締めくくる。

一方、一般的な教科書の場合では、指導したい文型、重要な機能語を易から難へと順序立て、それらが使われるような場面を設定して編集されている。従って、そのようなsettingを自然な内容として成立させるためには、目的とする文型を何度も使うわけにはいかないし、指導したい語句や文型に関係のないことも教える必要が出てくる。いきおい、指導項目が多くなり、日本語の説明を余儀なくされて、知識の記憶が主導になる。

そのような、一般的な教科書を使って効果的に教えるには、その時間内に指導可能な、より基本的に重要な文型や少数の語句を選び出し、それらを<好ましい指導の仕方>に当てはめて導入と練習を行えばよい。

3. 級友の自発的発言を正しく聴取できているかチェックする仕方：

復習や練習のとき、学習者には積極的に自由に発言させるが、級友の発言の内容がきちんと聴き取れているかどうか、確かめる。

Teacher: You will say what he/she said. といって一人の学習者を指名する。学習者は次のように言って、今聴いた級友の発言の内容を自分のことばで言う。または、級友の発言を繰り返す。

Learner: He/She said, “_____.”

非常に簡単だが、効果的な仕方である。関係代名詞whatに抵抗があるなら、

Teacher: What did he/she say?

Learner: He/She said, “_____.”

4. 日本語の助けを不要にする教材配列 (Grading) と授業の仕方：

「初期言語指導の原則」 No. 6

指導のstepsを最小にする。昨日学んだことを利用して、今日学ぶことを教える。今日学んだことを役立てて、明日学ぶことを教える。

I. A. Richards & C. Gibson (1975): *English Through Pictures, Book 1*, 洋販, pp.4~7

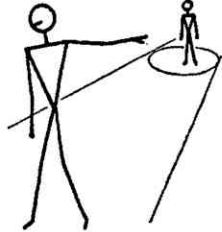
* ページ内の読む順序は、左→右。下へ行って、左→右。絵が文字の意味である。

4

I am here.



He is there.



It is here.



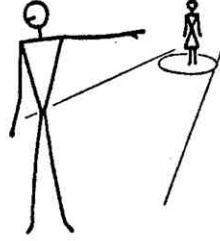
It is there.



She is here.



She is there.



They are here.



They are there.

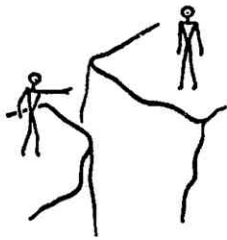


am [æm] here [hiə/hjə] is [iz] there [ðeə]

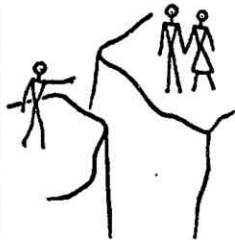
are [ɑ:]

6

You are there.



You are there.



It is there.



They are there.



You are here.



We are here.



We are here.



They are here.



we [wi:]

7

* 既習事項：I, You, He, She, It, They, * 新学習事項：here, there; am, are, is; we

1. It is here / there. It → (黒板の両端、Itが置いてあった場所に、それぞれ女性と男性の二人を後ろ向きに立たせて、) She, Heにかえていく。
2. She is there. He is there. → (教師はShe, Heに背を向け、全員の方を向いたまま、二人を一緒にして、) They are there. → (She, Heを除く全員で、) We are here. → (She, Heを前に向け、二人に向かって、) You (複数) are there. → (She, Heは二人で) We are here. → (She, Heのひとりに向かって、)
3. You (単数) are there. ←→ (教師) I am here. (She, Heそれぞれに、) You (単数) ←→ I を同時、交互に行う。

上記 1 ～ 3 は、具体的に、次のように行う。

It に使う物は、学習者がその名前を知らない物が良い。知っていると、学習者はその名前を言いたがる。例えば、「黒板消し」などはわかるまい。「黒板消し」(erasers) を 2 つ用意して、黒板の左右両端に 1 個ずつ置く。T (教師) は黒板に向かって、左側の「黒板消し」の左に立ち、正面を向き、左手で「黒板けし」を指して、

“It is here.” (2 度言う。) その位置で、同じく左手で黒板の右端に置いてある「黒板消し」を指して、“It is there.” (2 度言う。)

次は、黒板の右側の「黒板消し」の右に立ち、正面を向き、右手で「黒板けし」を指して、

“It is here.” (2 度言う。) 同じく右手で左側の「黒板消し」を指して “It is there.” (2 度言う。)

一応、これで It is と here / there の演示はすんだが、学習者が理解できたか check が必要である。

まず、一人の L (学習者) を最初の T (教師) の位置に行かせて、T と同様のことをやらせる。あるいは、T が、黒板の左右にあるいずれかの「黒板消し」一つを前席の L のところへ持参して、その L に、“It is here.” と言わせ、遠くに残してある「黒板消し」を指して、L が “It is there.” と言うように、仕草によって仕向ける。T が手伝っても良い。

次は全員に対する練習をさせる。全員に対しての練習では、最初に、バレー・ボールぐらいの大きさで軽い球体を使って、ひとりの L に投げる。受け取った L が、“It is here.” それに触れられる Ls (学習者達) も “It is here.”

触れられない Ls は “It is there.” と言う。多少騒がしくなるが、まあ、いい
ではないですか。ボールが T のところへ帰ってきて、最後は、T: “It is here.”
Ls: “It is there.”

次に、今の左右の「黒板消し」の位置に男性と女性の Ls を、それぞれ
正面から見て後ろ向きに立たせる。T は左右どちらかの L の側に行って立
ち、“He / She is here .” (2度言う。) 反対側にいる L を指して、“She / He is
there .” と言う。直ぐに、もう一人別の L を T の側へ呼び、T は仕草でい
ま T がやったように、L にも仕草とともに言わせて、手で示したことの意
味を明確に認識させる。

さらに T は、前に出ている後ろ向きの二人の Ls の一人を指し示して、Ls
全員に向かって、その situation を言語化するように仕向けると、“He / She
is there .” と言う。

次は、前に出ている後ろ向きの二人をそのまま、一緒に寄せる。T は全
員の方を向いて、T: “They are here.” (2度言う。) T は二人からできるだけ離
れた場所へ移動してから、“They are there.” と言う。そして全員にも言う
ように仕草する。T も大きな声と一緒に、T & Ls: “They are there.”

そして直ぐ、全員に手を繋がせて、まず上に上げさせ、そのままの状態
で、T: We, We と 2 度言う。Ls も T に真似て、We, We という。T の仕草
と音頭で 3 度目に一緒に、We で下げ、are で上げ、here で下げる。もう一
度、同様に、繋いだ手を上げさせ、全員で We, We と騒ぐ、そして声が揃
ってきたら、前と同じく、下げて、上げて、下げる。“We are here.” T は Ls
全員に向かって、You (複数) are there. 前に出ている二人を全員の方に向か
せて、二人にも手を繋がせて、(恥ずかしくて手が繋がらない時は、T が真ん中に入って
手を繋ぎ、三人で、) “We are here.”。他の全員は、“You are there.” と言う。(直前
で、They are, We are と学習しているので、Ls からの You (複数) are は出易い。)

次に、T は、前の二人の名前を言って、
T: A さん、B さん、“You are there.” その二人は、LA・B: “We are here.” と言う。

今度は、Tは教室の前横、前の二人と他の全員から見える位置で、“I am here.”（2度言う。）前に出ている一人の名前を言って、

T: Aさん、“You（単数） are there. I am here.”（2度言う。）

LA: “I am here. You are there.”

T: Bさん、“You are there. I am here.”

LB: “I am here. You are there.”

T: （全員の方を向き、一人一人を指差して、）“You are there.”

Ls: “I am here. You are there.”

T: “I am here.” “Good! Thank you.”

なお、授業中は仕草（cues）を用いて、学習者の側からの発言を促す。教師の話す英語の量は、学習者より少ない。また、教師の動きは意味を持つので、学習者が誤解をするような、無駄な動きはしない。

Ⅵ. 基本習得期の授業を成就させる条件

1. 1クラスの学習者数は、学習への自覚、年齢、その他、学ぶ側の実状によって異なるが、概ね10人～15人程度までが望ましい。

20人を超えると教師の負担は過重になり、slow learnersへの援助に支障をきたす。さらに、語学習得のために最も必要とする、一人ひとりの英語使用時間が少なくなる。使わなければ、使えるようにはなれない。

また、学習者と教師との個人的な触れ合いが失われ、学校英語教育が、教育としての機能を果たせなくなる。言うまでもなく、授業は極めて有効な個人指導の好機である。

2. 1週の授業回数は、最低3回以上を必要とする。

I－2でも述べたが、1週5回の授業があるとしても、1年間に英語に触れている時間は、英語圏で10日間を過ごす時間にも満たない。

再び計算式をしめすが、1週5回の授業（授業1時間＝50分）、年間35週とすると、1年間の授業時間は、

$$50分 \times 5 \times 35 = 8,750分 \div 146時間$$

これを仮に英語圏で、道を歩き、学校へ行き、バスに乗り、テレビを視聴するなどの日常の生活と比べると、1日（24時間）に英語に触れる可能性の高い時間は、睡眠時間の8時間を引いた16時間で割ると、

$$146時間 \div 16 \div 9日（1日16時間英語に触れたときの1年間分）$$

となり、1年間の英語授業は、英語圏で過ごす時間の10日間未満。つまり、3年間でようやく1ヶ月程度を英語圏で過ごすことに相当する。さらに仮に、英語圏で1日8時間しか英語に触れる機会がなかったとしても、

$$146時間 \div 8 \div 19日（1日8時間英語に触れたときの1年間分）$$

1年間で、19日間未満にしか相当しない。英語の授業が、日本語を排除した授業であれば、多少の不足を補うこともできるが、日本語を使う時間が多ければ、この概算の妥当性は高くなる。「英語のシャワーを浴びる」ととは遥かに程遠い日数である。

1週3回の授業というのが、どれほど最低限度ぎりぎりの回数であるかわかる。

3. 教師が教材研究と指導方法研究のために、必要にして十分な時間が、勤務時間内に確保できること。

この条件が満たされない限り、日本語を排除した「基本習得期の目標」を達成するための授業をすることは難しい。

教師を授業研究ができないほど多忙に追い込めば、指導の仕方に創意を欠き、授業をマンネリ化させ、slow learnersを増やすことは間違いない。さらに、教師から豊かな人間性を奪い、学習者への瑞々しい見返りが阻まれる。英語教育は、英語指導を通した人間教育であることを忘れてはならない。

そして何よりも学習者に、教科の面白さに気付かせることは、授業の基本中の基本である。制度の変更や細かな管理を強めても、指導の効果は上がらない。教師が時間をかけて、学習者の一人ひとりと向き合うこと、そ

れが、優れた成果を实らせる。

福田誠治 (2006) 「競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功」 朝日新聞社

Ⅶ. 基本習得期の教材に相応しい語彙: BASIC English by C. K. Ogden

「初期言語指導の原則」 Nos. 11, 12, 13, 14

英語は、世界で広く使われている現状を見れば、英語母語話者の占有言語ではなくなっている。従って、英語母語話者と同じ表現の仕方でなくても、伝達内容が正しく伝えられる英語表現であればよい。英語のルールを守り、一語一語、英語として正しく使われ、受け手に間違いなく伝達されることが何よりも優先されるべきである。即ち、英語母語話者の表現とは異なる、使い手の文化から創造される表現であっても、内容の正確な伝達が何よりも大切である。

このような観点から、英語の基本習得期の目標達成に相応しく、少ない語数でも使用範囲の広い語彙として、BASIC Englishがある。これは C. K. Ogden (1889～1957) が、英語に本来備わっている特質から発掘 (“discover”) した、full Englishの根幹をなす基本語彙である。

1. BASIC English 誕生の契機と考案の基盤

1920年、C. K. Ogden と I. A. Richards (1893～1979) が共著「意味の意味」の執筆中に、ことばの「意味」の意味の分析と取り扱い方について考えていた時であった。そのとき語の定義をしていると、いつもいくつかの要素的な語が用いられることを発見した。そこで彼らは、これらの語だけで他のすべての語の代わりが出来るのではないかと考えた。

実は、要素的な制限語彙ですべてを表現できるのではないかという考えは、Leibnitz (1646～1716)、John Wilkins (1614～72) など、学者の間では数世紀にわたって話題に上がっていたが、具体化には至らなかった。Ogdenは、Richardsとの共同執筆以前から、世界共通語の構想に関する歴史書を丹念に読み、また言語の思想に及ぼす影響、“word magic” に関する資料を収集して研究を深めていた。

様々な数多くの困難に直面したが、特に、複雑な要素を縮約的に内包す

る動詞の性質などについては Jeremy Bentham (1748~1832) の「虚構の理論」から多くを学んだ。それは、Ogdenの語彙制限への研究に大きく寄与した。また、L. W. Lockhart や Dr. F. G. Crookshank などの有能な協力者を得て、実験に実験を重ね、1920年から10年を経た1930年に最終的な BASIC English が発表された。

C. K. Ogden (1932) *Bentham's Theory of Fictions*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd. / I. A. Richards (1943) *Basic English and Its Uses*, Kegan Paul, pp.22-24; (1968) *Design for Escape*, Harcourt, Brace & World, Inc., pp.66-68

ことばには “window”, “table”, “door” などのように具体的な物を表す語と、“cultivation”, “co-operation”, “poverty”, のように、指し示す本体がなく、その中に沢山の内容を包含している抽象的な語がある。抽象的な語は、‘A Ladder of Abstraction’ で示したように、レベルが上がるほどその指示物（意味）は多くなり、ますます正確な意味を決めることができない。

抽象的な語も具体的な語も、文法的には特別に問題はないので、この2種類のことばの本質的な違いを自覚せずに使っていると、誤解を生じて思想交換が行き違い、コミュニケーションの混乱を招く。

そこで Ogden は、抽象的な、指し示す本体のない、いわゆる虚構を表す語については、そのなかに縮約されている複数の意味要素を分解し、普段よく使われる具体的な語を使って言い換えればよくわかると考えた。具体的で身近な語は指示物（意味）を皆が共有できるから、誤解を最小限に抑えることができる。この考えはOgdenの言語観の重要な部分であり、これが BASIC English 考案の基盤になっている。

2. BASIC English Word List

BASIC English 語表では、文の構成要素が次の3つに大別され、各語群ともアルファベット順に並べられているので、求める語を一目で探すことができる。

*作用詞・その他 (Operations etc.)、100語

……動詞16、助動詞2、前置詞、副詞、代名詞、冠詞、など。

*物の名 (Things)、600語

……一般的な名詞、400語。

……絵に描ける名詞、200語。

*性質の名 (Qualities)、150語

……一般的な性質を持つ形容詞、100語。

……反対の性質を持つ形容詞、50語。

BASIC ENGLISH

作用詞その他 100 語

COME
GET
GIVE
GO
KEEP
LET
MAKE
PUT
SEEM
TAKE
BE
DO
HAVE
SAY
SEE
SEND
MAY
WILL
ABOUT
ACROSS
AFTER
AGAINST
AMONG
AT
BEFORE
BETWEEN
BY
DOWN
FROM
IN
-OFF
-ON
-OVER
THROUGH
TO
UNDER
UP
WITH
AS
FOR
OF
TILL
THAN
A
THE
ALL
ANY
EVERY
NO
-OTHER
SOME
SUCH
THAT
THIS
I
HE
YOU
WHO
AND
BECAUSE
BUT
OR
IF
THOUGH
WHILE
HOW
WHEN
WHERE
WHY
AGAIN
EVER
FAR
FORWARD
HERE
NEAR
NOW
OUT
STILL
THEN
THERE
TOGETHER
WELL
ALMOST
ENOUGH
EVEN
LITTLE
MUCH
NOT
ONLY
QUITE
SO
VERY
TOMORROW
YESTERDAY
NORTH
SOUTH
EAST
WEST
PLEASE
YES

物の名 (名詞)

一般物 400 語

ACCOUNT	EDUCATION	METAL
ACT	EFFECT	MIDDLE
ADDITION	END	MILK
ADJUSTMENT	ERROR	MIND
ADVERTISEMENT	EVENT	MINE
AGREEMENT	EXAMPLE	MINUTE
AIR	EXCHANGE	MIST
AMOUNT	EXISTENCE	MONEY
AMUSEMENT	EXPANSION	MONTH
ANIMAL	EXPERIENCE	MORNING
ANSWER	EXPERT	MOTHER
APPARATUS	FACT	MOTION
APPROVAL	FALL	MOUNTAIN
ARGUMENT	FAMILY	MOVE
ART	FATHER	MUSIC
ATTACK	FEAR	NAME
ATTEMPT	FEELING	NATION
ATTENTION	FICTION	NEED
ATTRACTION	FIELD	NEWS
AUTHORITY	FIGHT	NIGHT
BACK	FIRE	NOISE
BALANCE	FLAME	NOTE
BASE	FLIGHT	NUMBER
BEHAVIOUR	FLOWER	OBSERVATION
BELIEF	FOLD	OFFER
BIRTH	FOOD	OIL
BIT	FORCE	OPERATION
BITE	FORM	OPINION
BLOOD	FRIEND	ORDER
BLOW	FRONT	ORGANIZATION
BODY	FRUIT	ORNAMENT
BRASS	GLASS	OWNER
BREAD	GOLD	PAGE
BREATH	GOVERNMENT	PAIN
BROTHER	GRAIN	PAINT
BUILDING	GRASS	PAPER
BURN	GRIP	PART
BURST	GROUP	PASTE
BUSINESS	GROWTH	PAYMENT
BUTTER	GUIDE	PLACE
CANVAS	HARBOUR	PERSON
CARE	HARMONY	PLACE
CAUSE	HATE	PLANT
CHALK	HEARING	PLAY
CHANCE	HEAT	PLEASURE
CHANGE	HELP	POINT
CLOTH	HISTORY	POISON
COAL	HOLE	POLISH
COLOUR	HOPE	PORTER
COMFORT	HOUR	POSITION
COMMITTEE	HUMOUR	POWDER
COMPANY	ICE	POWER
COMPARISON	IDEA	PRICE
COMPETITION	IMPULSE	PRINT
CONDITION	INCREASE	PROCESS
CONNECTION	INDUSTRY	PRODUCE
CONTROL	INK	PROFIT
COOK	INSECT	PROPERTY
COPPER	INSTRUMENT	PROSE
COPY	INSURANCE	PROTEST
CORK	INTEREST	PULL
COTTON	INVENTION	PUNISHMENT
COUGH	IRON	PURPOSE
COUNTRY	JELLY	PUSH
COVER	JOIN	QUALITY
CRACK	JOURNEY	QUESTION
CREDIT	JUDGE	RAIN
CRIME	JUMP	RANGE
CRUSH	KICK	RATE
CRY	KISS	RAY
CURRENT	KNOWLEDGE	REACTION
CURVE	LAND	READING
DAMAGE	LANGUAGE	REASON
DANGER	LAUGH	RECORD
DAUGHTER	LAW	REGRET
DAY	LEAD	RELATION
DEATH	LEARNING	RELIGION
DEBT	LEATHER	REPRESENTATIVE
DECISION	LETTER	REQUEST
DEGREE	LEVEL	RESPECT
DESIGN	LIFT	REST
DESIRE	LIGHT	REWARD
DESTRUCTION	LIMIT	RHYTHM
DETAIL	LINEN	RICH
DEVELOPMENT	LIQUID	RIVER
DIGESTION	LIST	ROAD
DIRECTION	LOOK	ROLL
DISCOVERY	LOSS	ROOM
DISCUSSION	LOVE	RUB
DISEASE	MACHINE	RULE
DISGUST	MAN	RUN
DISTANCE	MANAGER	SALT
DISTRIBUTION	MARK	SAND
DIVISION	MARKET	SCALE
DOUBT	MASS	SCIENCE
DRINK	MEAL	SEA
DRIVING	MEASURE	SEAT
DUST	MEAT	SECRETARY
EARTH	MEETING	SELECTION
EDGE	MEMORY	SELF

絵に描けるもの 200 語

ANGLE	KNEE
ANT	KNIFE
APPLE	KNOT
ARCH	LEAF
ARM	LEG
ARMY	LIBRARY
BABY	LINE
BAG	LIP
BALL	LOCK
BAND	MAP
BASIN	MATCH
BASKET	MONKEY
BATH	MOON
BED	MOUTH
BEE	MUSCLE
BELL	NAIL
BERRY	NECK
BIRD	NEEDLE
BLADE	NERVE
BOARD	NET
BOAT	NOSE
BONE	NUT
BOOK	OFFICE
BOOT	ORANGE
BOTTLE	OVEN
BOX	PARCEL
BOY	PEN
BRAIN	PENCIL
BRAKE	PICTURE
BRANCH	PIG
BRICK	PIN
BRIDGE	PIPE
BRUSH	PLANE
BUCKET	PLATE
BULB	PLOUGH
BUTTON	POCKET
CAKE	POT
CAMERA	POTATO
CARD	PRISON
CART	PUMP
CARRIAGE	RAIL
CAT	RAT
CHAIN	RECEIPT
CHEESE	RING
CHEST	ROD
CHIN	ROOF
CHURCH	ROOT
CIRCLE	SAIL
CLOCK	SCHOOL
CLOUD	SCISSORS
COAT	SCREW
COLLAR	SEED
COMB	SHEEP
CORD	SHELF
COW	SHIP
CUP	SHIRT
CURTAIN	SHOE
CUSHION	SKIN
DOG	SKIRT
DOOR	SNAKE
DRAIN	SOCK
DRAWER	SPADE
DRESS	SPONGE
DROP	SPOON
EAR	SPRING
EGG	SQUARE
ENGINE	STAMP
EYE	STAR
FACE	STATION
FARM	STEM
FEATHER	STICK
FINGER	STOCKING
FISH	STOMACH
FLAG	STORE
FLOOR	STREET
FLY	SUN
FOOT	TABLE
FORK	TAIL
FOWL	THREAD
FRAME	THROAT
GARDEN	THUMB
GIRL	TICKET
GLOVE	TOE
GOAT	TONGUE
GUN	TOOTH
HAIR	TOWN
HAMMER	TRAIN
HAND	TRAY
HAT	TREE
HEAD	TROUSERS
HEART	UMBRELLA
HOOK	WALL
HORN	WATCH
HORSE	WHEEL
HOSPITAL	WHIP
HOUSE	WHISTLE
ISLAND	WINDOW
JEWEL	WING
KETTLE	WIRE
KEY	WORM

性質の名 (形容詞)

一般性質 100 語

ABLE	AWAKE
ACID	RAD
ANGRY	BENT
AUTOMATIC	BITTER
BEAUTIFUL	BLUE
BLACK	CERTAIN
BOILING	COLD
BRIGHT	COMPLETE
BROKEN	CRUEL
BROWN	DARK
CHEAP	DEAD
CHEMICAL	DEAR
CHIEF	DELICATE
CLEAN	DIFFERENT
CLEAR	DIRTY
COMMON	DRY
COMPLEX	FALSE
CONSCIOUS	FEBLE
CUT	FEMALE
DEEP	FOOLISH
DEPENDENT	FUTURE
EARLY	GREEN
ELASTIC	ILL
ELECTRIC	LAST
EQUAL	LATE
FAT	LEFT
FERTILE	LOOSE
FIRST	LOUD
FIXED	LOW
FLAT	MIXED
FREE	NARROW
FREQUENT	OLD
FULL	OPPOSITE
GENERAL	PUBLIC
GOOD	ROUGH
GREAT	SAD
GREY	SAFE
HANGING	SECRET
HAPPY	SHORT
HARD	SHOT
HEALTHY	SIMPLE
HIGH	SLOW
HOLLOW	SMALL
IMPORTANT	SOFT
KIND	SOLID
LIKE	SPECIAL
LIVING	STRANGE
LONG	THIN
MALE	WHITE
MARRIED	WRONG
MATERIAL	
MEDICAL	
MILITARY	
NATURAL	
NECESSARY	
NEW	
NORMAL	
OPEN	
PARALLEL	
PAST	
PHYSICAL	
POLITICAL	
POOR	
POSSIBLE	
PRESENT	
PRIVATE	
PROBABLE	
QUICK	
QUIET	
READY	
RED	
REGULAR	
RESPONSIBLE	
RIGHT	
ROUND	
SAME	
SECOND	
SEPARATE	
SERIOUS	
SHARP	
SMOOTH	
STICKY	
STIFF	
STRAIGHT	
STRONG	
SUDDEN	
SWEET	
TALL	
THICK	
TIGHT	
TIED	
TRUE	
VIOLENT	
WAITING	
WARM	
WET	
WIDE	
WISE	
YELLOW	
YOUNG	

The
Orthological
Institute,
10
King's
Parade,
Cambridge,
England.

3. BASIC English 850語選定の具体的基準——BASIC Englishは、「基本英語」。

1. ごく普通の現代英語中の単語であること。
2. 分かり易い比喩的方法で、意味が推移し易い語であること。
3. 世界中の人々の必要度をできるだけ広く満たす語を優先させること。
4. 他の語の内容を分解して言い直す力、すなわち、定義能力の優れた語であること。
5. 感情的色彩の強い語ではないこと。
6. 物事の評価を目的とする語ではないこと。
7. 特殊な分野だけで使われる語ではないこと。
8. 文学的スタイルのための贅沢な語ではないこと。
9. 数語で明確に言い換えられるような語ではないこと。

室勝／小高一夫(1982)「英語を書く本——BASIC ENGLISHの理論と活用」洋販出版, p. 12

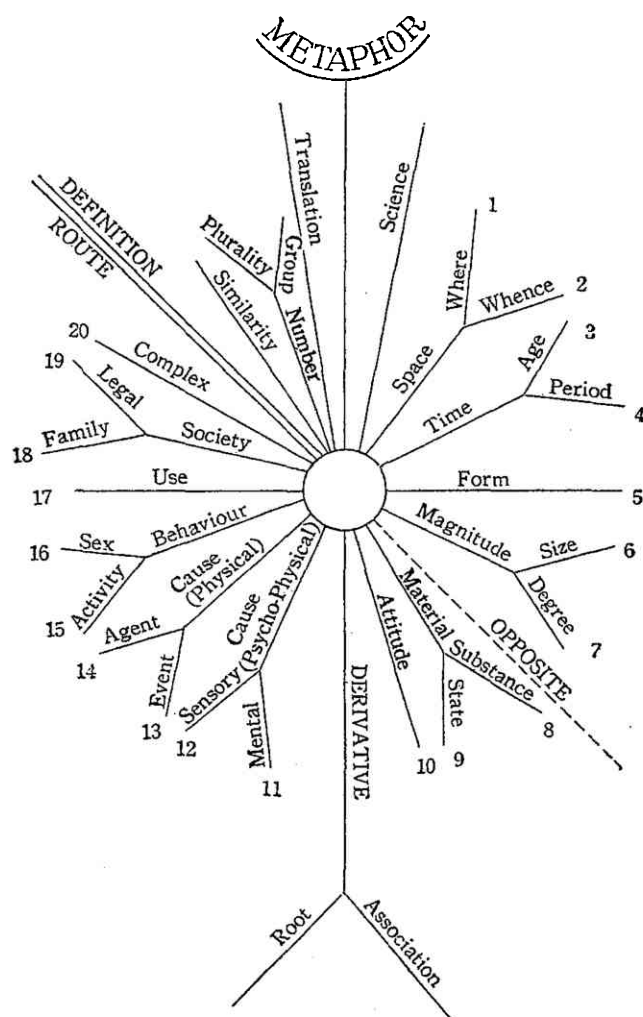
Ogden は、国際補助語と英語指導を目的に、1,000語を目指して語彙の整理を初め、最初7,500語の有用な語を選んだ。それらから、複雑な内容が縮約した動詞を分解して4,000語を排除した。そして、残りの3,500語から次の制限によって1,500語を減じ、2,000語にした。これらの語の機能と使用価値を正確に検証するために、次項に示すPanoptic Eliminator (贅語排除器) などを使って、それ以下の語数では英語としてどうしても不自然になるというぎりぎりのところまで精査して、漸く、最終的な850語を得た。

こうして選り抜かれたBASIC Englishは、850語ではあるが、E. L. Thorndike の、使用頻度を機械的に統計した「基礎英語」(basic English) や、H. E. Palmer の、平易な言い換えに適した「簡易英語」(Simple English) とも異なり、基本的に、世界中の大人が思想の交換に役立てられることを目的として、一語一語、幅広く使える英語が選択されている。しかも、それぞれの語がメタファーを作るなどして有機的に結びつき、何でも言えるようにシステム化されている。

従って、必ずしも普段、英語母語話者が常用している決まり文句や平易な語ばかりではない。しかし、英語の根幹になる語で成り立っているから、これを習得していれば、full Englishへの移行は容易であり、システム化さ

れているお陰で、極めて合理的に学習することができる。従って、英語を母語とする人の英語に近づくための「基礎英語」というより、言語の本質に基づく「基本英語」である。

4. Panoptic Eliminator (贅語排除器)



高田保 (1941) 「ベーシック英語」 研究社, p.16

精査する語を真ん中の円内に入れ、その語と同類の語を放射線の外側に置き、精査する語との関係を検討する。

例えば、dogを円内に入れ、外側には、*puppy(子犬)、*bitch(雌犬)、*poodle(プードル)、*collie(牧羊犬)、*setter(獵犬)、*cur(性質の悪い雜種犬)を置く。

- * puppy は、Time (Age) の関係で、youngがあるから、young-dog となって不要である。
- * bitch は、Behavior (Sex) の関係で、femaleがあるから、female dog となって不要である。
- * poodleは、Society (Family) の関係で、houseがあるから、house-dog となって不要である。
- * collie と setterは、Use の関係で、collie は sheep があるから、sheep-dog, そして setter は短く説明的に dog trained to setといえるから不要である。
- * cur は、Society (Family) の関係で、複数の意味を内包しているが、語表中に、‘Things’ の humour, sort, ‘Qualities’ の bad, mixed があるから、bad-humoured dog of mixed sort と短く説明的に言い換えられる。

以上のように検討をした上で、最終的に dog が BASIC English として採用されたと思われる。

同様に、抽象的な虚構の語、例えば *‘cultivation’ は、development; planting. *‘co-operation’ は、working together. *‘promise’ は、(statement of) undertaking; hope. *‘poverty’ は、(condition of) being poor. *‘civilization’ は、stage of development in society; society in high stage of development; forward development. など、基本語の組み合わせと、短い言い換えによる説明で容易に排除することができる。

また互いに近い意味を持った語群からは、応用範囲の広い語を選んだ。例えば、「椅子」は日常的には chair であるが seat を採用している。chair, stool, bench, couch, sofa, settee など必要ならば seat を使って、*chair=seat with its back for a person, *stool=seat without its back or arms, *bench = seat for a number of persons specially used outside, *couch=bed-like seat with its back and arms, ... などと説明的に表せる。

5. 「動詞」の排除——BASIC Englishには「動詞」がない。

BASIC Englishは、3つの種類に分けられているが、中でも“operations” (作用詞) の100語は、他の語を互いに結びつけて意味のある関係を構成する機能語として、最も注目すべき重要な語群である。Richardsのことばを

借りれば、

- ①BASIC Englishの学習者と教師にとって非常に手のかかる語群である。
- ②BASIC Englishが簡潔に成立できたのは“operations”のお陰である。
- ③“operations”の研究により、BASIC Englishのみならず、full Englishの言語構造についても優れた洞察力を得ることができる。
- ④言語一般の性質、内在する生産的な力、そしてその限界について、多くのことを学ぶことができる。

I. A. Richards (1943) *Basic English and Its Uses*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., pp.24~25

さらに、“operations”のなかでも、最初の16語は普通、動詞といわれている。しかし、一般的に、動詞が意味と表現の上で分解できるのに比べて、これらの16語が人間の基本的な動作を表し、分解不可能であることから、Ogden は普通の動詞と区別し、助動詞の will と may を含めて“operators”と呼んだ。即ち、BASIC Englishには「動詞」がない。以下に詳細を示す：

語表の左端、come から take までの最初の10語は、これ以上縮小できない単純な行為を表す語である。このうち seem だけが、行為というより描写を表していて、少しこの分類にそぐわないが、be と相補う関係であることを考えれば理解しやすい。例えば、We *seem* wise and good perhaps; we *are* perhaps foolish and bad.

いわゆる動詞というのは、これらの“operators”によって分解できる。例えば、enter=come in, meditate=give thought or take thought 即ち、“operators”を使えば、他の動詞を使わなくて済むのである。この事実から、BASIC English には動詞がないと言うことができる。

次に、be, do, have は助動詞としても使われる。

最後に、say, see, send は、厳密には不可欠な語ではない。例えば、When we *say* something, we *put* it into words. と言えるし、When we *see* something, it *is* in view or we *have* it before our eyes. また、When we *send* someone, we *make* him go. と言える。しかし、あまりにも回りくどくて、ぎこちないことから、実用性を考慮して語表に入れてある。

前述のように、Ogden は贅語の整理で、一番初めに4,000の動詞を排除したが、16語の operators は、空間における方向 (directions) や位置 (positions) を表す方位語 (directives) と結びつけば、文脈の中で4,000の動詞の役割を果たすことができる。

[illegible]

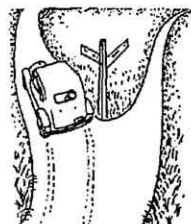
6. 語彙の拡張

— 70 —

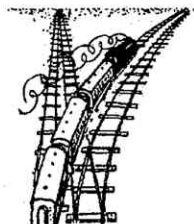
BRANCH



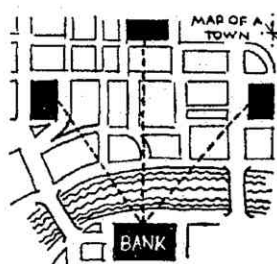
Three branches of a tree.



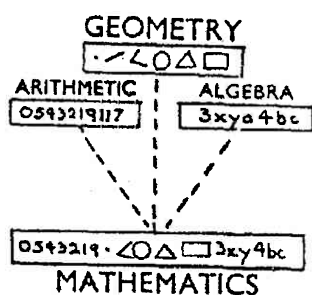
(e') A branch of a road.



(e') A branch of a railway.

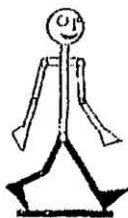


(e') A bank with three branches.



(e') Three branches of Mathematics.

STEP



A step.



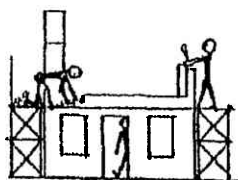
A dance step. (e') Going up a step.



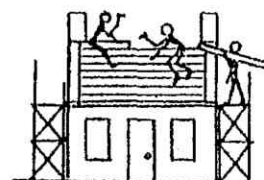
(e') The man is building steps.



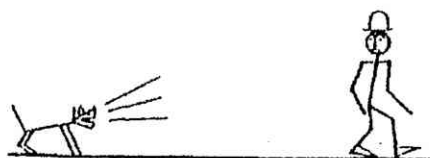
(e') He is a step farther forward with the work.



The workmen are building a house.



(e') They are a step farther forward with the work.



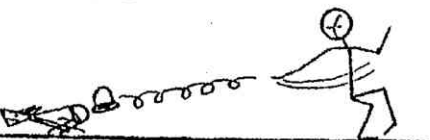
The dog makes a noise.



The man takes steps to make it quiet.



The dog again makes a noise.



(e') The man takes steps to make it quiet.

* A branchは、木の枝、各枝は「分枝」である。次の絵は、左が「枝道」、右が「支線」。これらはそれぞれ、木の枝から意味が広がっているので、Expansion¹ (e¹)。次は、銀行の「支店」。これは、広がり方の抽象度がやや高いので、Expansion² (e²)。最後は、数学の算数、幾何、代数の「分野」。これは更に高い抽象度なのでExpansion³ (e³) になる。

* A step は、1 歩。次は、脚、手、腕、足の全部が何度動いても「ダンスのステップ」。次の絵は、足が階段を1段上がっている。A stepは、元の意味 (root sense) の「1 歩」ではなく、「1つの階段」を意味するので意味が広がったから、Expansion¹。

次の下左図は、「階段」を積む仕事をしているので、同じExpansion¹。その右図は、1 階段というわけではなく、“a step” は「1 階段 (少しだけ)」作業が進んだという意味で、「1 歩」、「1つの階段」より抽象度が上がって、Expansion²。次の下右図では、階段とは関係ないが、左よりも家の建築が「少しだけ」進んだという意味なので、やはり、Expansion²。

次の絵では、最初、犬を追いかけたが、最後は追いかける代わりに帽子を投げるという「手段」をとった。従って、さらに抽象度は高くなって、Expansion³になる。

このように、木の枝→枝道／支線→支店→分野、そして同様に、1 歩→階段→1 階段だけ／少しだけ→手段というように、「木の枝」とか「1 歩」という元の意味 (root sense) から比喩的に意味が広がっている。

人は同じ反応を起こさせるものは同一であると感じる。例えば、春の柔らかな風が快い感じを起こさせる場合と、愛らしい少女の柔らかな手の感じとが同じ場合、「春は柔らかな手をしている」という。これがメタファーを生む基本的過程である。

ところで、Richards に拠れば、用いられている語が、伝達する主意 (tenor) と文字通りの伝達手段 (vehicle) としての二つの概念 (ideas) を持っていればメタファーである。例えば、馬の脚 (*the leg of a horse*) と机の脚 (*the leg of a table*) を比べると、馬は脚で歩くことができるが、机は脚で歩かない。しかし、立つことは双方ができる。このような時、「立つ」という

共通の特性がメタファーの根拠である。

ただ、文字通りの用法とメタファー的な用法との境界は、必ずしもはっきりしないことがある。例えば、「脚」ということばを文字通りに使うことができるものに何があるか？ 馬や蜘蛛はたしかに文字通りに脚を持っているが、チンパンジーの脚は2脚か4脚か？ ヒトデの持っているのは脚か腕か？ ひとが義足を着けているとき、それはメタファー的な脚なのか、文字通りの脚なのか？これは、両方であると答えるよりほかはない、とRichardsは言っている。

I. A. Richards (1936) *The Philosophy of Rhetoric*, Oxford University Press, pp.117-119

またところで、前出の「春は柔らかい手をしている」は、文字通りの「手」(vehicle)と、春風と少女の手との共通の特性、「柔らかい快さ」(tenor)の二つの概念を持っている。メタファーである。

長い間、メタファーは言語の飾りで、布の縫い取りのように、外観は美しくするが、その有用性については何も付け加えないとして、無視されてきた。しかし、メタファーは日常的にどこにでも存在することばの本質である。そういえば今のこの話、You see? という see もメタファーであった！

思想、感情、虚構など目に見えない抽象の世界を、具体的で身近なことばに置き換えるメタファーは、言語の単なる飾りではなく、五感で感覚的に意味が捉えられる分かり易い表現であり、日常の情報伝達において、空気のように important な存在である。

7. BASIC Englishから作られるメタファー

以下、a) ~e) までは、相沢佳子著 (1995) 「ベーシック・イングリッシュ再考」(リーベル出版, pp.192~193) から引用。

a) 具体物で抽象的なことを表す

the current of public opinion (傾向), field of interest (分野), writing with fire (情熱), as an instrument (手段), root of the trouble (根元), etc.

b) 具体物で形状の類似したものを表す

a cake of soap, leaves of paper, a stick of chalk, a long train of horses (行

列), a wing of the building, etc.

c) 身体部位で物の部分を表す

an arm of a machine, a body of men (一団), an eye of a needle, the mouth of the river, the neck of a bottle, etc.

d) 物理的動き、特に身体動作で抽象的な状態、動作を表す

give a blow (ショック), a fall from power, have a good grip of (理解), a man with a push (やる気がある), make a slip (誤り), etc.

e) 抽象概念でも、より身近な把握しやすいもので把握しにくいものを表す

from this angle, birth of a new idea, breath of wind, burst of angry words, new light on the question, etc.

以上は、名詞についての例であるが、他に、形容詞、方位詞、動詞の例、そして更に、統語上のメタファーについての例も挙げられている。なお、上に挙げた各例の後尾にある“etc.”は、それ以外にも例語句が続いて記載されていることを示す。

なお、この本は、現在、日本で出版されている BASIC English についての最も詳細な理論書であり、アカデミックなよもやま話も挿入された楽しい読み物でもある。

8. H. E. Palmer の Simple English と BASIC English

*E. A. Poe: *The Gold Bug* の 1 節を引用して、双方の特徴を瞥見する。

'The Gold Bug' by E. A. Poe (Original)

In the inmost recesses of this coppice, not far from the eastern or remote end of the island, Legrand had built himself a small hut, which he occupied when I first, by mere accident, made his acquaintance. This soon ripened into friendship—for there was much in the recluse to excite interest and esteem. I found him well educated, with unusual powers of mind, but, infected with misanthropy, and subject to reverse moods of alternate enthusiasm and melancholy.

‘The Gold Bug’ in Simple English , in H. E. Palmer’ pen

In the thickest part of this wood, not far from eastern or further end of the island, Legrand had built himself a small hut in which he lived when I first, by mere accident, made his acquaintance.

This acquaintance soon became friendship—for there was much in this lonely man to make one interested in him and like him. I found him well educated, with unusual powers of mind, but with a dislike of meeting people or of mixing with other men, subject to strange contrary moods; being at time lively and enthusiastic and at others quiet and sad.

‘The Gold Bug’ in BASIC English, in A. P. Rossiter’s pen

Legrand had made himself a small house in the thickest part of this undergrowth, near the east, or far end of the island, and he was living there when by chance we had our first meeting. In a short time he became my friend, for he was the sort of man for whom one’s interest quickly becomes respect, though he had no taste for company. It was clear that he had been given a good education and had uncommon powers of mind; but he was troubled by feeling that men were against him and by strange humours: one minute he would be completely happy and a minute later deeply sad—all for no reason.

PalmerのSimple Englishの英文は難語句と思われるものを同義語、あるいは、それに近い平易な語句で置き換えているから、初学習者にも読みやすい。また、原文の文体、文脈における語句の意味などはできるだけ残るように配慮されている。従って、単語数を徐々に増やしながら、英文に慣れ親しむには好適な語彙であると言える。

Ogden の BASIC English では、訳者は原文の内容を自分の脳内で reference して、新たに再表現している。即ち、訳者が自分の過去の経験・知識を使って、抽象度の高い語や、込み入った箇所を BASIC English で分解し、その語句の Referent を具体的にイメージしてから書いている。従って、読者は自分の脳内にイメージし易く、内容を明瞭に理解できる。これは、BASIC English 自体が内容分析に適した語彙であるからできることである。

9. 「北風と太陽」 in BASIC English

北風と太陽

ある日、北風と太陽がいいあそびしていました。

「あそこにいるたびびとの服をぬがせたほうがかちだ。」

北風はふきまくりました。どうしてもだめです。

太陽は、キラキラてりつけました。

「おう、あつい。たまらない。」

たびびとは、はだかになって水にとびこみました。

‘The North Wind and the Sun’ in BASIC English, in K. Odaka’s pen

One day, the North Wind and the Sun were having an argument. “One of us, who is able to let the man on a journey over there take his coat off, will get the better of the other in the argument.”

The North Wind gave a strong and hard blow down to him. However, it was not able to let him take his coat off. On the other hand, the Sun gave a warm and bright light over to him.

The man on the journey, saying “Oh, it’s very warm. I’m not able to put up with this heat!” took off his clothing and got a jump into the water.

上記の話は中学生でも、その場の状況をイメージしながら、いろいろな角度から、手持ちの英語で楽しく書ける。文章の内容は、読者それぞれが自分の過去の経験を元に理解するので、いろいろなことばで言い換えられる。この一つの寓話に対する訳者の理解も様々であり、翻訳文も多岐にわたる。室 勝（～1992）は、茶会の心得「一期一会」を46通りのBASIC Englishで書き表している。（*Ibid.* 252-254）

ところで、文章の内容理解が一人ひとりの経験によるのと同様に、美は作品に内在せず、視聴者・鑑賞者・読者の側の経験によるという Richards の考えは、*ETP Book II*, pp. 142-143 にも BASIC English で書かれている。

Beautiful things give us pleasure.



When she sees herself in the glass,
she sees that she is beautiful.
That gives her pleasure.

When I say that she is beautiful, that
gives her pleasure.



There is a smile on her face
now.



Why is the smile there?

It is there because she has a feeling
of pleasure.
Her pleasure is the cause of her
smile.
She is saying to herself,
"I am beautiful."

She is saying to herself
that she is beautiful.



A smile does not make a
sound. A laugh makes a
sound.



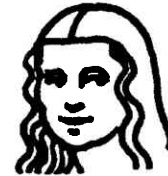
A laugh is a smile with a sound.

This is a great painting
by Leonardo.



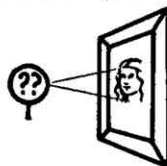
Its name is the
Mona Lisa.

The picture is beautiful.
That is certain.

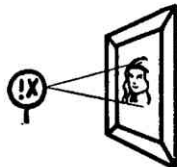


Was the woman
beautiful? Was Lisa
herself beautiful?
That is not certain.

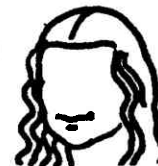
I have my idea
of that.



He has his idea.



She had her idea. We
may have different ideas
of how beautiful that
woman was.
There is no measure
of the beautiful.



おわりに...ひと言をいくつか。

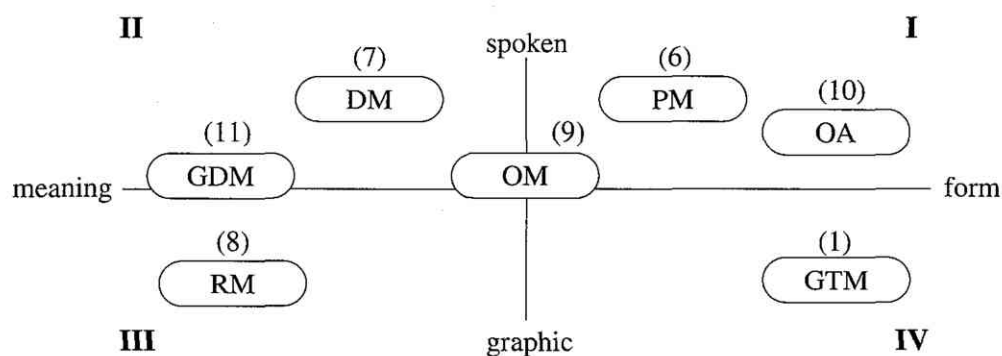
- * 優れた英語の授業とかけて、落語のperformanceと解く。その心は、少しの道具でイメージ湧かす。落語は、扇子(センス)と手拭いだけで、聴衆のイメージを掻き立てる。授業も同じ。少ない教具を巧みに使ってわからせる。わかるとは、seeすること。脳内にイメージ (pictures in the mind) できることである。
- * 私は、ことばとイメージで考える。周囲は意味の闇である。ことばは意味のスポット・ライト。当たったところに意味、発生。手持ちのことばで考えて、闇から意味を切り取ろう。切れ味優れたことばの懐刀(かたな)、いつも磨いて持ち歩こう。はじめにことば(BASIC)ありき。
- * 私の授業、「セマンティック」(Semantic Reading)：本文読んだら顔をあげて、文字を離れてイメージし、左脳の作業を右脳に移す。バランス取れた状態で、発話のアイディア呼び起こす。
- * I. A. Richards が C. Gibson と、「初期言語指導の原則」に則って、作った本がETP (ENGLISH THROUGH PICTURES, BOOK I-III)。その教授法が、GDM (Graded Direct Method)。1952年、ハーバード帰国の吉澤美穂(1911~1981)が普及に努め、今も根強く、「基本」を支えて活きている。
- * GDMの特性は、*The Teaching of English in Japan* (英潮社)で、他の教授法との比較ができる。次頁図表参照。

- ① Grammar-Translation Method
- ② Practice Method
- ③ Mastery Method (= Rational Method)
- ④ Natural Method (= Conversational Method)
- ⑤ Psychological Method (= Gouin Method)
- ⑥ Phonetic Method
- ⑦ Direct Method
- ⑧ Reading Method
- ⑨ Oral Method (= Oral Direct Method)
- ⑩ Oral Approach (= Audio-Lingual Approach)
- ⑪ Graded Direct Method

Table 2. Features of Methods

	method number		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
1	basic theory	linguistic	○	○				○	△		○	○	○
		psychological			△	○	○		○	○	○	○	○
2	native language	in use	○				△	△		△	△	△	
		exclusive		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	learning form	habit-formational		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		cognitive	○					△		△	△		
4	grammar	inductive	○	○									
		deductive			○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	structure vs. situation	structure	○	○				○			○	○	
		situation			○	○	○		○	○			○
6	recognition vs. production	recognition	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
		production		○	○	○	○	○	○		○	○	○
7	form vs. meaning	form	○	○			△	○			○	○	△
		meaning		△	○	○	○		○	○	○	△	○
8	spoken vs. written	spoken		○	○	○	○	○	○		○	○	○
		written	○				△	△	△	○	△	△	○

Table 3. The Position of the Methods



Kaichi Ito "Traditional Methods and New Methods: A Study on the Methods Suited for the Japanese." In Ikuo Koike, Masao Matsuyama, Yasuo Igarashi, Koji Suzuki, ed. (1978) *The Teaching of English in Japan*, Eichosha Publishing Co., Ltd., Tokyo, pp.207-210

参考文献

<言語と脳の関係> (五十音順)

- * 荒井 良 (1982) 「脳と言語」 社会思想社
- * オブラー, L. K. & ジュアロー, K. (2002) 「言語と脳 神経言語学入門」 (若林茂則・割田杏子共訳) 新曜社
- * 角田忠信 (1978) 「日本人の脳」 大修館書店
- * —— (1981) 「右脳と左脳—その機能と文化の異質性」 小学館
- * —— (1985) 「脳の発見 脳の中の小宇宙」 大修館書店
- * 角田忠信・田中靖政・大森荘蔵・沢田允茂 (1986) 「言語・意識・生活」 共立出版
- * 久保田競 他 (1985) 「脳の手帳 ここまで解けた脳の世界」 講談社
- * 小泉英明 編 (2001) 「脳図鑑 21」 工作舎
- * 小出五郎 (1988) 「脳 1400グラムの宇宙」 朝日新聞社
- * 酒井邦嘉 (2002) 「言語の脳科学」 中公新書
- * スミス, N. & ツインプリ, I. M. (1999) 「言語学習と心のモジュール性 ある言語天才の頭脳」 (毛塚恵美子・小菅京子・若林茂則共訳), 新曜社
- * 時実利彦 (1962) 「脳の話」 岩波新書
- * —— (1969) 「目で見る脳」 東京大学出版会
- * —— (1972) 「脳を考える」 日本経済新聞社
- * 南堂久史 (1985) 「脳から言語へ」 大和書房
- * ビアリストク, エレン&ハクタ, ケンジ (2000) 「外国語はなぜ身につかないか」 新曜社
- * 藤永 保 (2001) 「ことばはどこで育つか」 大修館書店
- * プリブラム, K. H. (1978) 「脳の言語」 誠信書房
- * ペンフィールド, W. & ロバーツ, L. (1959) 「言語と大脳」 上村忠雄・前田利男訳, 誠信書房
- * 本庄 巖 (2000) 「ことばをきく脳 シャべる脳」 中山書店
- * 山鳥 重 (1985) 「脳から見た心」 日本放送出版協会
- * 柳澤桂子 (1995) 「脳が考える脳『想像力』のふしぎ」 講談社

<言語理論と教授法関係> (アルファベット順)

- * 相沢佳子 (1995) 「ベーシック・イングリッシュ再考」 リーベル出版
- * Dale, E. (1954) *Audio-Visual Methods in Teaching*, Holt, Rinehart & Winston
- * Florence, P. S. and Aderson, J. R. L. ed. (1977) *C. K. Ogden A Collective Memoir*, Elek Pemberton
- * Frost R. P. (1972) *About Semantics*, Channing L. Bete Co. Inc.

- * Hayakawa, S. I. (1941) *Language in Thought and Action*, Harcourt, Brace & Co., Inc. (大久保忠利訳『思考と行動における言語』岩波書店, 1951)
- * 片桐ユズル (2002) 「意味の意味 見て分かる意味論の基礎とBASIC English」京都修学社
- * — (2003) 「BASICをつかいこなす EPのメタ言語：語彙力の強め方」GDM News Bulletin, No. 55, June
- * — (2005) 「『実践批評』の意味の4分法：ものそのものと向かいあう英語入門期の指導 言語の指示的用法からおしえる」京都精華大学紀要, 第28号
- * Korzybski, A. (1933) *Science and Sanity*, The Institute of General Semantics
- * Lockhart, L. W. (1942) *Basic Picture Talks*, The Basic English Publishing Co.
- * 升川 潔 (1975) 「言語理論の生かし方」開隆堂
- * 室 勝 (1969) 「意味論における三本の柱」GDM英語教授法研究会
- * — (1972) *Basic English as a Sorting Mashine*, GDM英語教授法研究会
- * — (1972) 「Basic Englishの文体」GDM英語教授法研究会
- * Ogden, C. K. (1932) *Bentham's Theory of Fictions*, Kegan Paul
- * — (1935) *COUNTER-OFFENSIVE AN EXPOSURE OF CERTAIN MISREPRESENTATIONS OF BASIC ENGLISH*, The Orthological Institute
- * — (1968) *Basic English: International Second Language*, Harcourt, Brace & World, Inc.
- * Ogden, C. K. & Richards, I. A. (1923) *The Meaning of Meaning*, Harcourt, Brace and World, Inc. (石橋幸太郎訳『意味の意味』興文社, 1936)
- * Richards, I. A. (1936) *The Philosophy of Rhetoric*, Oxford University Press, Inc.
- * — (1942) *How to Read a Page*, W. W. Norton & Co., Inc.
- * — (1943) *Basic English and Its Uses*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- * — (1968) *Design for Escape World Education Through Modern Media*, Harcourt, Brace & World Inc.
- * — (1974) *Poetries Their Media and Ends*, Mouton, The Hague・Paris
- * Richards, I. A. & Gibson C. (1975) *English Through Pictures, Books I-III*, 洋販
- * Russo, J. P. (1989) *I. A. Richards His Life and Work*, The Johns Hopkins University Press
- * 吉澤美穂 (1965) 「絵を使った文型練習」大修館書店
- * — (1981) 「教科書を使いこなす工夫」大修館書店

＜その他＞

- * 福田誠治 (2006) 「競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功」朝日新聞社